
インフィニットストラトス もう一人の男は超能力者!?

布仏雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニティストラトス もう一人の男は超能力者!?

【Nコード】

N6965W

【作者名】

布仏雪

【あらすじ】

IS学園に織斑一夏とともにもう一人男が入学してきた。一夏という唐変朴オブ唐変朴ズが巻き起こす騒動の陰で、超能力者として、学生として、どんな学園生活を送るのか。

プロローグ

最初は信じられなかった。

まさか、女しか扱えないはずのインフィニットストラトスが男である

俺が触って動き出すなんて思わなかったからだ。

ここでは、俺がなぜIS学園を受験することになったかを語ろう。

中3の時俺は、亡き父の知り合いから、国連直轄の秘密機関に入って

ほしいと言われた。俺は迷わず入ることにした。超能力者である俺は、

今まで友人の一人もできることはなかった。自分の持つ能力のせい

で。高校への進学さえ迷っていた俺にとっては、いい機会だと思った。

恐れ

られ、気味悪がられてばかりだったこの能力を少しでも求めている人が

いるのなら、その人のために力を尽くしてみようと決心した。

知り合いに連れられ、秋にアメリカにやってきた俺は、仕事内容と今後の

予定を機関のボスに説明された。

「我々の主な任務は、テロリストや国際指名手配犯の逮捕または抹殺

である。よって、ここには世界の名だたる超能力者たちが集結している。

もちろん私もその一人だ。」

ここまでは驚かなかった。しかしボスは次にとんでもないことを言った。

「しかし君はこの機関に所属する超能力者のなかでもずばぬけて強い力がある。よって、戦争の際、核を含む弾道ミサイルの処理もお願いしたい。」

「『獄炎』を知ってるんですか！？なぜあなたが」

「君のお父さんも、この機関に所属していたからね。色々耳にしている。

さて、今後の予定なんだが・・・」

驚きの色を隠せない俺に、ボスはさらに追い打ちをかけるように言った。

「国際指名手配犯などというものはなかなか見つからんから、普段は

そんなに仕事はない。しかし、我々としてもとても興味深い事柄がある。

君もテレビで見て聞いたことがあるだろう。『女性しか動かせない兵器』

のことを。」

プロローグ（後書き）

初投稿となります。 よろしくお願いします。

オリ主とのカップリングはのほほんさん（布仏本音）で行って参りたいと思います。

オリ主キャラ設定

氏名 一ノ瀬時雨

性別 男

身長 165.5 cm

体重 55 kg

誕生日 9月5日

血液型 A型

超能力 ? 光や熱などのエネルギーを吸収し、そのエネルギーを
時と場合に応じて、放出することができる。※

? ホルモンバランスを変えて、女性になることが可能。

? オーラが見えるー（人間のみ）

? 千里眼

※熱エネルギーを光エネルギーへといった、変換も可能
振動エネルギーで空気にひびを入れられる。

戦闘時は自らの体をエネルギー体と化して戦うことも
ある。

? 目で見ただけで教科書などの内容を完全に記憶できる。

人物 右目が青、左目が赤、眉毛は細め。少しウエーブのかかった

腰まで届く長い茶髪が特徴的。大抵の人が美少女と
見間違ふ。

生まれつき声質が女子で、声変りはしていない。

好きな食べ物海鮮丼、嫌いな食べ物はキムチ
両親は交通事故で他界している。

小中学校時代は黒歴史というほどに良い思い出がないため、
本人は話したがらない。これが、機関に入る一つの要因と
なった。

しかし、性格はとても陽気で、周りが女子だらけでも、普

通に

コミュニケーションを取れる。―（むしろ女子のほうを取りやすいらしい）

女性に間違われることを嫌っている。趣味は工作、

映画・音楽鑑賞。

謎の宝石のおもちゃを小袋に入れてお守りのように携帯している。

好きな女性のタイプは癒し系だが、本人はまず、自分の超能力を

怖がられたりすることが多かったため恋愛に関して高望みしない。

オリ主キャラ設定（後書き）

どうでしょうか？

ちよつと設定を細かくしすぎたような気がするようないような。
感想お願いします。

第一話 クラスメイトは女ばかり（前書き）

I Sの知識はアニメから入ってきたものが大半ですが、ご理解ください。あと、かつこの前に名前つけます。では、第一話始まります。

られなかった。声かけんのはH Rが終わってからにしょ。

全員「……」

山田先生「あ、え？あ、今日からみなさんは、このI S学園の生徒です。

この学校は全寮制。学校でも、放課後も一緒です。仲良く助け

助け合って、楽しい三年間にしましょうね。」

全員「……」

おいおいおい、先生困ってんぞ。いくら二人しかいない男子を意識してるからって無反応じゃあんまりだろうが。てかお前ら何そんな一点をガン見してんだよ……ってああ、あの男か。いまだに固まってるよ。緊張しすぎだよ。

そんな気張る事ねえってたかだかH Rで。

「じゃ、自己紹介をお願いします。出席番号順で……」

あ、自己紹介か。俺は名字が一ノ瀬だからすぐだ。……もうまわってきたか。

「えと、一ノ瀬時雨です。趣味は音楽鑑賞です。よろしく願います。」

俺は無難に自己紹介して、席についた。そしてあの男の様子を見ると・・・

山田先生 「織斑君、織斑一夏君！」

一夏 「は、はい!!」

やはりがちがちだ。緊張しすぎだろおい。お、立った。

一夏 「織斑一夏です。よろしくお願いします。」

お、言えたな。よかったよかった。・・・あれ？まだ立ってる。どうしたんだ？

あとは座るだけだろ。なにをまようことがあるん・・・

一夏 「以上です!!」

一夏以外「ドーーーーーン!!!!」

何言っただこいつはああ!? しかも本人はけろってしてるし『ガン!!!!』

ん!? 何だ今度は!?

再び前を見ると一夏は頭を抱えてしゃがんでいる。ああ、ツツコまれたのか。

「いっつー……げ!!!! 千冬姉!? 『ガン!!!!』 つつー!!!」

織斑先生 「学校では織斑先生だ。」

突っ込みきついなー織斑先生。あれ? ってことは一夏のお姉さんなのか。この人なんちゅうアグレッシブな先生だ。あのゲンコツは食らいたくねえな。思いつきり
覇気こもってそうだし。

山田先生 「先生、もう会議は終わられたんですか。」

頭を抱える一夏を完全にスルーしたな、山田先生。同情するよ。
一夏。

織斑先生 「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。」

女子全員「キャー」

耳をつんざくような歓声が響き渡った。なんなんだいたい？ 千冬様とかお姉さまとかいろいろうるさい。てか何？ この人有名人なのか？

「ねえねえそれじゃあ織斑君ってあの千冬様の弟!？」

「それじゃ世界でISを使える二人の男のうちの一人と
いうのも、それが関係してるのかな。」

織村先生「静かに！！諸君らにはこれからI Sの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習

だが、基本動作は半月で体にしみこませろ。いいか？ いいなら返事をしろ。よくなく

ても返事をしろ。」

全員「はい！！！！！」

織斑先生の言葉で一気にみな引き締まった。相変わらず一夏は固まっているが。

そして、ISの説明が山田先生からあった。つか、ISって兵器なのに軍事利用が

禁止されててスポーツになってんだな。不思議なもんだ。なんて考えていると、

隣の席の子に、『よろしくね、一ノ瀬さん』と言われた。

あれ、何か勘違いされてないか？と俺はその時感じて首をひねっている、

山田先生 「ここまでで何か質問のある人いませんか？」

山田先生が質問を求めた。

??? 「はいはいはい！」

山田先生 「はい、布仏さん。」

次の瞬間、俺の違和感が見事に的中することになる。

布仏 「もう一人のISを動かせる男子って何組に所属してるんですか。」

山田先生&俺 「・・・・・・・・」

一夏の次は俺が固まることになった。山田先生も固まっている。織斑先生はというと・・・・なぜか笑っている。楽しそうだ。

布仏 「?なんで山田先生固まってんですか。時雨さんまで。」

織斑先生 「布仏、お前のいう『もうひとりのISを動かせる男子』はな、

そこにいる一ノ瀬のことだぞ。」

布仏 「ええ!?!」

鷹月 「でも、女子に見えますよ!?!それに声だって。」

「生まれつきだよ。それに声変りしなかったんだ。それともう一つ言わせて

もらおう。こんな外見だが俺は男だよ!女子にはないのだ仏あるし!!」

そう言ってみんなの方を見て、つばを飲み込んでみせると、布仏さんだけ

でなく、クラスメイト全員(一夏除く)が一瞬固まり、次の瞬間、

第一話 クラスメイトは女ばかり（後書き）

第一話終了。

よろしければ感想お願いします。

第二話 受難は続く(前書き)

二日か一日に一話くらいで無理なく投稿しようと思っ
てます。
では、第二話始まります。

第二話 受難は続く

布仏 「ごめんね、勘違いしちゃって。一ノ瀬君見た目女の子だったから。」

声も高かったし。本当にごめんね。」

H R後に布仏さんが謝りに来た。怒りがおさまってきた俺は普通に許した。

「いや、いいいいよ。布仏さん。女子全員勘違いしてたみたいだし。誤解
が一気に解けたから、むしろ感謝してる。あと、呼び方時雨でいい。」

布仏 「よかった〜まだ怒ってるんじゃないかと思って。あ、私のことも」

本音って呼んでくれていいよ〜」

「分かった。ところで本音。教室の外からも一夏への視線がすごいぞ。
えなおい。」

つか、本人はうんざりしてるみたいだけど。」

本音 「そだね〜男子が珍しいからだと思うけど。あと、他のクラスの人
はまだ時雨君を女の子だと思ってるんじゃないかな〜」

「そっか、俺を女と勘違いしてる奴他のクラスにもいるんだっけ。同じ

男子でも眼中にないみたいだしな。でも人づてに誤解は解けるだろ。」

本音 「ところでさゝ織斑君ってこの学園に友達いたんだね」

「え？マジで？」

一夏の席のほうに目をやると、一夏が誰かに連れられて教室から出ていった。
なんか凜としてんなおい。あ、一夏に声かけんの忘れた。まあいいや。後でも。

「へー。いるんだ。俺はいなかったけど。だから、本音が初めての友達かな。
改めてよろしくな。本音。」

本音 「よろしくね〜時雨君」

握手した。なんかのんびりしてて可愛い。そんな事を思っていると、授業時間が
やってきた。テキストテキスト。と言っても俺は全ページちゃちゃ

つと見るだけで
覚えるからいいんだが。なので、ぼーっと前を見ていると、なにやら一夏が困っているようだ。全部わからないって!? ある程度参考書事前に読んでおこうぜ。山田先生困ってんじゃない。あ、織斑先生が近付いてきた。こりゃ叱られるなー。

織斑先生 「織斑、入学後の参考書は読んだか？」

一夏 「あの分厚い奴ですか。」

織斑先生 「そうだ、必読とあっただろう。」

一夏 「間違えて捨てました。『バーン!!』うわあっ!!！」

出席簿ではたかれているよなにやってんだよこいつ。普通中身見るだろ。

織斑先生 「後で再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな。」

一夏 「いや一週間あの厚さはちょっと『やれといっている』は

い、やります。」

こえーなー織斑先生。あの眼で睨まれたら従うしかないわな。ド
ンマイ、一夏。

山田先生 「では、授業を再開します。テキストの12ページを開
いてください。」

そんなこんなで、授業が終わり、一夏に話しかけ・・・

??? 「ちよつとよろしくて？」

られなかった。誰だあの女？

一夏 「んあ？」

??? 「まあ！なんですのそのお返事。わたくしに話しかけられ
るだけでも光栄

なので、それ相応の態度というものがあるの
ではないかしら？」

うるせえよ知らねえよ誰だよ偉そうに。クラスメイトに

それ相応の態度も何もあるかよ。普通。

一夏 「悪いな、俺君が誰だか知らないし。」

??? 「わたくしを知らない！？セシリア・オルコットを！？イギリスの代表

候補生にして、入試主席のこの私を！？『ああ、質問いいか？（一夏）』

ふんっ下々の者の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ？」

イギリスの代表候補生なのかこの高飛車女。それで入試主席で貴族！？ああ、

だから偉そうなのか。だが、俺はお前の下についたつもりなんかねえっての。

一夏 「代表候補生って、何？」

全員 「ドーーーーーン」

それ聞いちゃいかんだろう、いくらなんでも。高飛車女が何か話してる。

何？『日本の男性というものはこれほど常識に乏しいものなのか？』

ふざけんじゃねえ！俺を含めんな！少なくともそいつよりは常識ある！

そっからの会話は高飛車女が代表候補生とは何かの説明とか理不尽な言動

とかだったのではほとんど聞き流した。あ、一応名前と呼ぶようになきゃな。

思わずあだ名で呼んだらめんどくさいことになりそうだし。なんて思ってたら

セシリアが聞き捨てならないことを言った。

セシリア 「何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

何い！？俺も倒したぞコラ！（後であれが試験だったって知ったけど）

一夏 「あれ？俺も倒したぞ教官。」

セシリア 「はあ！？」

一夏 「倒したっていうか、いきなり突っ込んできたのをかわしたら、

壁にぶつかって動かなくなったんだけど。」

こいつも教官倒したのかい。つうか教官は猪突猛進かい！っとそんなこと

言ってる場合じゃねえ！俺も言いたいこと言っとかないと！

「俺も倒した。俺の場合はISが装着されてほれぼれしてたらいきなり襲ってきたから

反射的にシールドごと殴ったら一撃で動かなくなった。あっけなかったな。あ、俺は

一ノ瀬時雨だ。よろしくな。一夏。」

一夏 「ああ、よろしく。時雨。」

セシリア 「そんな・・・私は確かに唯一だと聞きましたのに・・・って

一撃でISが停止するパンチって何なんですかそれは！

！」

「気にしたら負けだ、その辺は。気が向いたら話すよ。」

一夏 「唯一ってのは『女子では』っていうオチじゃないのか？」

「ああ、そういうことか。」

セシリア「あなたたちも教官を倒したっていうの！？『お、落ち着けて（二夏）』
これが落ち着いていられますか！」

などと話していると鐘が鳴った。話は次回に持ち越しだな。

放課後、寮に荷物を置きに行こうと思っていると、

織斑先生「一ノ瀬、少し話がある、ついてこい。」

織斑先生に呼び出された。俺は何も悪いことしてないはずだが。
ああ、入学試験の話かも。まだまだ受難は続きそうだ。

第二話 受難は続く（後書き）

なんとか第二話終了。次回は少し超能力の話も入るかな。それにしても織斑先生に呼び出されると怒られるイメージが強いなー。なお、「」の前に名前がない場合、オリ主ということで。よろしければ感想お願いします。

第三話

織斑先生の話&相部屋初日（前書き）

残暑長いです。でも頑張ります。

第三話始まります。

第三話

織斑先生の話&相部屋初日

かくして、織斑先生から呼び出されてしまった俺だが、何の話だろう。
などと思っていると、生徒指導室に着いた。やっぱ何かしたのかな、俺。

織斑先生 「さて、話なんだが・・・まあ心配しなくてもいい。そう固く

なるな。何かやらかしたというほどのことではない。ただな、

お前に一つ報告と、入学試験の内容のことで聞きたい事がある

だけだ。」

やはりそうきたか。そりゃあの倒し方は異常だよな、普通の人間には。

織斑先生 「それでまず、入学試験の内容のことなんだがな、試験官の話

では、一瞬で懐に入り込まれ殴り倒されたりしいんだが、

どうやってやった？普通は一発殴ったぐらいでISが停止に追い

込まれる事はないんだが。」

「やっぱり変でしたよねあの倒し方は。実を言うと俺、超能力者なんです。

信じられないかもしれないですけど。試験の時もそれ使って勝ったような

もんですよ。」

織斑先生 「超能力か。いいだろう、信じてやる。『信じてくれるんですか!?!』」

ああ、そういう力でもなければあんなことは起きんからな。それで?

具体的にどんな能力を使ったんだ?」

「簡単に言うそうですね、俺、エネルギーを吸収して放出する事ができるんです。

いつもは、太陽エネルギーをはじめとする熱エネルギーや光エネルギーを吸収

してるんですけど。放出する際に、それらのエネルギーを地震とかで生じる振動

エネルギーとかに変換できるんです。今回の場合、それを使ったんです。」

織斑先生 「なるほどな。だから一撃でISを停止に追い込めたのか。ということは

ISを装着してなくても、お前は試験官を倒せたんだな?」

「まあそんな感じですね。基本的に攻撃受けても大抵エネルギーとして吸収する
んで効きませんし。言っちゃなんですけど、今の俺にとって、I
Sは足かせみたい
なものですし。」

織斑先生 「ISの訓練はこれから私がみっちり指導する。ああ、
専用機持ちである
セシリアにも教えてもらえばいい。お前なら必
ず上達する。」

「ありがとうございます。でも、セシリアさん俺と一夏を思いつ
きりバカにしたた
んですけど。ものすごく偉そうなんですけど。」

織斑先生 「これから上達すれば、自然とそういう態度もなくなっ
てくる。相手の

実力を認めざるを得なくなるからな。特に、お
前のIS適性はAだ。これ
は専用機持ちと同レベルだ。すぐ追いつける。」

織斑先生 「さて、この話はもう終わりだ。それで報告なんだが、
今まで女子しか
今までI Sを動かせなかったから男子のデータを取りた
いってことだな、

お前と一夏に近々専用機が用意される。このことはまだ秘密だ。ああ、

一夏にもまだ言わないでおいでくれ。あいつうっかりばらしそうだから。」

「分かりました。（やっぱり信用されてないなあ、一夏。）」

織斑先生「それともう一つ。」

「はい、何でしょうか？」

織斑先生 「お前と一夏、寮で相部屋になるだろう？ あんなバカな弟だが、

仲良くしてやってくれ。」

「はい！」

俺の返事を聞くと、織斑先生は少し笑みを浮かべて、生徒指導室から出て行った。

俺もそのあとに続いて出て、晩飯を食ってすぐ寮に向かった。

~~~~~  
~~~~~

さて、寮に着いたわけだが・・・部屋の前に人がうじゃうじゃいる。

入りづれえなおい。とりあえずどいてもらおう。

「すまん、そこどいてくれるか？入れない。」

女生徒A 「あ、ごめんね。」

この声とともにみんなどいてくれたので、部屋に入ると・・・

一夏 「・・・・・・・・」

ベッドに突っ伏している。

「おい、一夏あー」

一夏 「・・・・・・・・」

返事がない。ただの屍のようだ。
とりあえずゆすって・・・

一夏 「んー？あ、時雨来たか。」

意識を取り戻したようだ。

「ああ来たぞ。その様子だと、まだこの状況に慣れてないか。ところで、休み時間にお前を連れてった女子って知り合い？」

一夏 「ああ、俺の幼馴染で、篠ノ之箒っていうんだけどさ、六年ぶりに再会したのひどいんだぜ。あいつ。自己紹介のとき、助けを求めても目逸らすし。さっきだってな、山田先生が部屋番間違っただけに俺に渡したのに、風呂上がりだったからって竹刀で切りかかってきたし。」

>PBR?

「竹刀で襲ってくるのかい。怒らせたら部屋のドア破壊しかねえじゃんそれ」

一夏 「そうなんだよなあ・・・ところで時雨。放課後すぐに千冬姉に呼ばれた」

みたいだけど、あれって何の用事だったんだ？」

「ああ、入学試験の内容のことです。うん・・・まあ、一夏には教えとくか。」

信じられないかもしれないけど、聞いてくれるか。」

一夏 「ああ、いいぜ。」

それから俺は織斑先生に言った事とをそっくりそのまま一夏に話した。

一夏 「そうなんだ、そんな能力持ってるのか。お前。その能力で今できること

あつたら、やってみせてくれないか。」

一夏も信じてくれたようだ、左手で筆入れをドアに向かって投げて右手に引き寄せてみせると、

一夏 「おー！すげえじゃん。面白い。」

驚いた。初対面で俺の超能力を信じ、全く気味悪がらない。今までの奴らとは違う。本当にいい人たちだ。織斑姉弟。

「ありがたいな一夏。あ、でも周りの女子にはくれぐれも秘密ってことで。」

まだばらすのは後にしたいんだ。いまばらすと騒ぎになるからさ。

」

一夏 「わかった。秘密にしておくよ。」

「よかった。ところで一夏。参考書、一週間以内に読まなきゃならんのだろうか？」

突っ伏してる場合じゃなかったんじゃないか？」

一夏 「ああ！忘れてたー！！！」

「まあ頑張れよー。一応手伝ってはやるからさー。」

一夏 「助かるぜー。あ、でも時雨もちゃんと覚えてるのかー？」

「ああ、かなり分厚かったから、三日ほどかけて全ページ見て覚えた。これから

テキストも覚えようかと思ってるよ。授業の進行に合わせてな。」

一夏 「レベル高いなー時雨は。記憶力も拔群かよ。」

それから一夏は時折俺にわかりにくいところをききながら参考書を読み進めた。

改めて見ると本当に分厚い。一週間で全部覚えるのは無理かもしれ

んな、これは。

そんなことを思いながら音楽を聴いたりシャワー浴びたりしている内に時間が0時

にさしかかろうとしていたので、俺たちは各々眠りに就いた。

第三話

織斑先生の話&相部屋初日（後書き）

第三話終了。さてさて次回はクラス代表決めに入りますねー
また設定がいろいろと変わってきそうです。悩みどころです。／－
あと、のほほんさんとの会話もぼちぼち増やしていこうと
思います。

よろしければ感想お願いします。

第四話 セシリアの宣戦布告（前書き）

第四話 セシリアの宣戦布告

早く目が覚めてしまった。まだ5時だ。慣れないところで寝るとどうも早く起きてしまう。まあ、昨日の織斑先生の話のこともあるんだが。教えてもらえと言われてもなあ。あのセシリアがそう簡単に教えてくれるとも思えねえよ。まして専用機持ちになる事なんて言ったらどんな反応すんだろ。

「はあゝ先が思いやられるぜ。」

一人音楽を聴きながら嘆いていると、一夏も起きてきたので、着替えて

共に学食で朝ごはんを食べるつもりだったんだが……

一夏 「なあ、なあっていつまで怒ってんだよ。」

箒 「怒ってなどいない。」

一夏 「顔が不機嫌そうじゃん。」

箒 「生まれつきだ。」

昨日一夏を竹刀で襲った奴か。一夏も朝から大変そうだな。何食おうか
迷って遅れてきた俺だが、なんかめんどそうだったので、少し離れた席で
朝ごはんを食べていると、

さゆか 「織斑君、隣いいかな。」

一夏 「ああ、別にいいけど。」

本音 「時雨君もとなりいい〜?」

「おはよう、本音。いいよー」

本音&癒子 「よしっ!」

本音達がやってきた。つか、本音のパジャマ随分ファンシーだな
おい。

本音 「うわ〜時雨君も織斑君も朝すっごい食べるんだー。」

癒子 「男の子だね。」

一夏 「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？

さゆか 「私達は、ねえ？」

癒子 「平気、かな。」

本音 「お菓子よく食べるし！」

お、耳動いた。やっべえ可愛いなおい。

箒 「私は先に行くぞ。」

一夏 「ああ、またあとでな。」

癒子 「織斑君って、篠ノ之さんと仲がいいの？」

さゆか 「昨日呼び出されたみたいだったけど。」

一夏 「ああ、まあ幼馴染だし」

本音&さゆか&癒子 「幼馴染!？」

一夏 「ああ、小学校一年の時に剣道場に通うことになってから、四年生まで

同じクラスだったんだ。あんまり覚えてないんだよねあ、昔のこと。」

織斑先生 「いつまで食べてる。食事は迅速に効率よく摂れ。」

やれやれ、さっさと片付けっか。

織斑先生 「私は一年の寮長だ。遅刻したらグラウンド10周させるぞ。」

うおー厳しいな織斑先生。さっさと教室に行きますかね。

~~~~~

織斑先生 「これより、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。

クラス代表者とは、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会の出席

など、まあ、クラス長と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。

誰かいらないか？」

癒子 「はい！織斑君を推薦します。『え！？（一夏）』」

女生徒A 「はい、私もそれがいいと思います。『ああ！？』」

一夏 「お、俺！？」

ドンマイだな一夏。頑張れ。

織斑先生 「他にはいないのか？いなければ無投票当選だぞ。」

一夏 「ちょっと待った！！おれはそんなのやらな『納得がいきませんわ！！』」



ああ？誰だ？ああ、またかセシリア。

セシリア 「そのような選出は認められません。男がクラス代表なんていい

恥さらしですわ。このセシリア・オルコットにそのような屈辱を

一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

うるせえよ。納得いかねえんなら自薦で立候補しろよ。

セシリア 「大体！文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと

自体、私にとっては耐え難い苦痛で・・・」

苦痛なら来なきやいいだろ。文化レベルを持ち出すな。偉そうなんだよ。

一夏 「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

おーもっと言ってやれ一夏あ

セシリア 「ムッ！！おいしい料理はたくさんありますわ！あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

思わず俺は立ちあがってセシリアを指さして言った。

「さっきから何言ってるんだよお前。そんなこと言ったらお前だって日本を侮辱してんだろが!!」

セシリア 「あなたには関係ありませんわ!」

「関係あるに決まってるだろ!日本人だからな!織斑先生、俺自薦で立候補します。」

織斑先生 「構わん。」

セシリア 「~~~~決闘ですわ!」

一夏 「おーいいぜ。四の五の言うより分かりやすい。」

「問題ないな、それで負ける気なんか更々ねえし。」

セシリア 「わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隷にしますわよ!」

一夏 「ハンデはどのくらいつける?」

セシリア 「は？あら、早速お願いかしら？」

「何勘違いしてんだお前。一夏お前に聞いてんだよ。ハンデはどの位ほしいかって」

セシリア以外の女子全員 「あはははははははははは！！！！！！！！！！」

癒子 「男が女より強かったのって、ISができる前の話だよ、織斑君。」

なめやがって。こいつは一度完膚無きままに叩き潰してやらなきゃ気が済まねえ。  
だから意気消沈している一夏に言った。

「一夏あ！！何ぼんやりしてんだあ！！やるからには叩き潰しに行くぞ！」

一夏 「え？あ、ああ。」

セシリア 「むしろ、私のほうがあなた達にハンデをつけなくていいか迷う

位ですわ。日本の男子はジョークセンスがあるのね。」

一夏 「ハンデはいらない。」

「同感だな。一対一で叩き潰してやる。総当たり戦でいいな？」

セシリア 「構わないですわ。」

織斑先生 「話はまとまったな。それでは勝負は次の月曜。第三アリーナで行う。」

一ノ瀬と織斑とオルコットは、それぞれ準備をしておくように。」

クラス代表選で決闘か。面白くなりそうだ。



#### **第四話 セシリアの宣戦布告（後書き）**

第四話終了。次回は決闘シーンですね。

さて、三人だからどうするか。

感想よろしくお願いします。

**第五話 クラス代表選 part 1 一夏vsセシリア(前書き)**

いよいよクラス代表選第一試合  
始まります。

## 第五話 クラス代表選 part 1 一夏vsセシリア

織斑先生 「織斑、一ノ瀬。お前達のISだが、準備まで時間がかかりそうだ。」

翌日のHR、織斑先生からそんな話があった。なんでだろう。

織斑先生 「予備の機体がない。だから、学園で専用機を用意するそうだ。」

ほう。専用機あの女と対戦できるのか。どんなのが用意されるんだ。

一夏 「専用機があるってそんなにすごいことなのか？」

訓練機よりはスペックがあることぐらい知ってるだら一夏。

セシリア 「それを聞いて安心しましたわ。クラス代表の決定戦、私とあなた達では、

勝負は見えていますけど、さすがにわたくしが専用機、あなた達が訓練機

では、フェアではありませんものね。」



まあ、そうだろうな。俺はどっちでもいいけど。

一夏 「お前も、専用機ってのを持ってるのか？」

セシリア 「ご存じないの？ よろしいですわ。庶民のあなた達に教えて

さしあげましょう。

庶民庶民うるせえよ。ここはイギリスじゃねえっての。

セシリア 「このわたくし、セシリア・オルコットは、イギリス代表候補生。つまり、

現時点ですでに、専用機を持っていますの。世界にISはわずか467機。

その中でも専用機を持つ者は、全人類六十億人の中でも、エリート中の

エリートなのですわ！」

一夏 「467機！？ たった？」

鷹月 「ISの中心に使われてる『コア』って技術は一切開示されてないの。現在、

世界中にあるISは、467機。その全ては、篠ノ之束博士が作成したものなのよ。」

へえ、一人でやったんだ。ん？篠ノ之？一夏の幼馴染の親戚かなのかな。

鷹月 「ISのコアって、完全なブラックボックスなんだって。

篠ノ之博士以外は、誰もコアを作れないんだから。」

そうかそうか極秘かあ。特許万歳。

鷹月 「でも博士は、コアを一定数以上作ることを拒絶しているの。国家、企業、

組織機関では割り振られたコアを使用して研究・開発訓練を行うしか無い

状況なんだよ。」

それは個人の自由だろうなあ。うん。

織斑先生 「本来なら、IS専用機は国家、あるいは企業に所属する人間にしか与え

られないが、お前らの場合、状況が状況なので、データ収集を目的とし

て専用機が用意される。理解できたか？」

「はい、なんとなく。」

鷹月 「あの、先生。篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の関係者なんですか？」

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ。」

箒以外の女子「ええええええええええええええええ！？」

へえ、そうなのか。そんなに驚くことでもないと思うが。

箒 「あの人は関係ない！！私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない。」

教室中が静まりかえった。当然だな。随分と姉を嫌ってるみたいだし。

「山田先生、授業を。」

山田先生 「あ、はい！それでは授業を始めます。皆さんテキストを出してください。」

今日は、昨日の続きから。」

授業が始まるようだ。さてさて、真面目に聞くとしますかね。

山田先生 「『IS』インフィニットストラトスは、操縦者の全身を、特殊なエネルギー

バリアで包んでいます。ISには、意識に似たものがあるって、お互いの対話、

つまり、一緒に過ごした時間でわかりあうというか、操縦時間に比例して、

IS側も、操縦者の特性を理解しようとしています。」

そうなのか、飛行機とは違うんだな。

山田先生 「ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください。」

ここまでで、質問のある人は？」

癒子 「しつもん。パートナーって、彼氏彼女みたいな感じですか。」

山田先生 「それはその、どうでしょう。私には経験がないので分

かりませんが・・・」

照れすぎだろ先生。はやしたてられてんぞー

そんなこんなで昼休みになって一夏と昼ごはんを食べに行くことになったわけだが、

一夏 「篠ノ之さん、飯食いに行かないか？」

まだ名字で呼ばなきゃならないのか。大変だな一夏。っと、俺もだれか呼んでみるか。

「誰か一緒に行かないか？」

本音 「はい！！はいはい！」

癒子 「行くよー！ちょっと待って！」

さゆか 「お弁当作ってきてるけど、行きます！」

本音達だ。やったぜ！

一夏 「やっぱりクラスメイト同士、仲良くしたいもんな。な、そう思うだろう？」

箒 「私はいい」

「おい一夏あ。早く行こうぜ。」

とりあえず本音達の近くから一夏を呼んだのだが・・・

一夏 「そう言うな。ほら、立て立て！」

箒 「おい！私には行かないと・・・」

一夏 「なんだよ、歩きたくないのか？おんぶしてやろうか？」

箒 「っ！離せ！！」

ぶっ倒されてる。強引な誘いはよくないぞ、一夏。めんどそうだ。

「三人とも、先に行こうぜ。」

本音&癒子&さゆか「うんっ！」

学食へさっさと行くことにした。

昼ごはんの最中話題はほとんど一つの事だった。

さゆか「そういえば一ノ瀬君。クラス代表選なんだけどさ、大丈夫なの？」

「大丈夫、なんとかなる。」

癒子「でも、負けるんじゃない？正直きついと思うよ。専用機同士でも。」

本音「そうだよ」

「全く問題ないな。絶対に勝ってやる。俺は訓練機でも問題ない。」

本音 「何か勝算でもあるの？」

「ある。ただ、今は言えん。勝ったら絶対教える。さて、そろそろ片付けるよ。」

本音 「分かったよ。代表選頑張ってね」

「ああ！絶対勝ってくる。それじゃみんな、またな」

本音&癒子&さゆか 「またね」

さて、月曜日、楽しみだ。

月曜日、放課後。俺と一夏は、セシリアのISを見ていた。すると、

山田先生 「織斑君！来ました！織斑君の専用IS！」



織斑先生 「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は、限られている

からな。ぶっつけ本番でものにしろ。」

ゲートが開いた。おー直接見るとやっばかけーなおい。

山田先生 「これが織斑君の専用機、『白式』です。」

織斑先生 「すぐに装着しろ。時間がないから、フォーマットとフイッティングは

自分でやれ。」

一夏がISに触ってる。んー!!早く乗ってみてえよ!お、乗るみたいだ。

織斑先生 「背中を預けるように、そうだ、座る感じでいい。後はシステム

最適化をする。」

山田先生 「セシリアさんの機体は、ブルー・ティアーズ遠距離射撃型のISです。IS

には、絶対防御というのがあって、どんな攻撃を受けて

も、最低限、操縦者

の命は守れるようになっていきます。ただその場合、シールドエネルギーは

極端に消耗します。分かっていますよね？」

織斑先生 「織斑、気分は悪くないか？」

一夏 「おお！いけるさ！」

織斑先生 「そうか。」

一夏 「箒、時雨。行ってくる。」

箒 「あ、ああ。勝ってこい。」

「全力でかましてこい！一夏！」

俺がそう言うのと、一夏は、すぐ、空へと飛んで行った。

セシリア 「最後のチャンスをあげますわ。」

一夏 「チャンスって？」

セシリア 「わたくしが一歩的な勝利を得るのは自明の理。今ここで謝る

というのなら、許してあげないこともなくってよ？」

一夏 「そういうのはチャンスとは言わないな。」

セシリア 「そう？残念ですわ。それなら・・・」

白式に警告の文字が映る。

セシリア 「お別れですわね！！」

セシリアのレーザーライフルが一夏に直撃した。

一夏 「うああああ！！」

衝撃で地面に落ちる。かろうじて着地するもすぐに追撃が来る。

一夏 「くそお！！俺が白式の反応速度に追いつけていねえ！！」

セシリア 「さあ！踊りなさい！わたくしセシリア・オルコットと、ブルー・ティアーズの奏でるワルツで！！」

やばそうだな一夏。なんとかなんねえのか。お、なんか出した。

一夏 「素手よりましだ！」

セシリア 「遠距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて。

笑止ですわ！」

一夏は、だんだんセシリアの攻撃をよけられるようになってきた。よしよしその調子でいけ！

セシリア 「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが

初めてですわね。ほめて差し上げますわ。

一夏 「それはどうも。」

セシリア 「では・・・そろそろフィナーレと参りましょう！！」

四機のブルー・ティアーズがレーザーを放ってくる。

セシリア 「左足！いただきますわ！！」

セシリアが左足にむかってレーザー・ライフルを放つ。  
それを一夏は近接ブレードでいなし・・・

一夏 「いちかばちか！！」

シールドを少しずつ削りながらセシリアに近づく。

セシリア 「むちゃくちゃしますわね！けれど、無駄なあがきですわ！！」

セシリアはなおもブルー・ティアーズを放ってくる。  
お？でも墜としてる。やるなあ一夏。

一夏 「わかったぜ！この兵器は、毎回お前が命令を送らないと動かない。

しかもその時、お前はそれ以外の攻撃ができない。制御に意識を集中

させてるからだ。そうだろ!!」

ブルーティアーズが二基、なおも一夏にレーザーを放つ。

一夏 「残り二基！（必ず俺の反応が一番遠い角度を狙ってくる！）  
距離を詰めればこっちが有利だ!!」

一夏はレーザーをよけながらブルー・ティアーズを二機とも撃墜した。

セシリア 「かかりましたわ。」

一夏 「!？」

セシリア 「四基だけではありませんわよ!!」

さっきまで飛んでなかった二基からミサイルが放たれる。マジッ  
すか。

一夏 「しまった!!」

一夏はよけようとするも・・・当たった。まずいなこれ。あ、煙が晴れてきたって  
ええ！？なんか何事もなかったかのように飛んでるよ。つうか、形変わってるし！！

セシリア 「まさか、ファーストシフト！？あなた、今まで初期設定だけの機体で

戦っていたというの！？」

一夏 「よくわからないが、この機体はやっと、俺専用になったらいいな。」

白式に、『雪片式型 使用可能』の文字が映る。

一夏 「『雪片』って千冬姉が使ってた武器だよな。ふっ、俺は世界で最高の姉さんを

もったよ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしなくちゃな。これから

は、俺も、俺の家族を守る。」

セシリア 「はあ！？あなた、何を言って・・・」

一夏 「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ。弟が出来じゃ、格好がつかないからな！」

ほうほう、姉思いだねえ。つか、織斑先生が昔使ってた武器が搭載されてる  
ってすげえなおい。

セシリア 「ああもう、面倒ですわ!!」

セシリアが一気にミサイルを四発放ってくる。全部墜としちまえ  
! 一夏!

一夏 「見える!!」

一夏が四発とも墜とした。そのままいけえ!!

セシリア 「!？」

一夏 「いける! うあああああ!!」

??? 「『プーーーーーーー』 試合終了、勝者、セシリア・オルコット」



あれ？なんでだろ？終わっちゃった。残念。

試合後、一夏と、俺と篠ノ之さんは、織斑先生から一夏が負けた理由の説明を受けた。

一夏 「俺、なんで負けちゃったんだ？」

織斑先生 「バリア無効化攻撃を使ったからだ。武器の特性を考えずに戦うから

ああなる。

一夏 「バリア無効化？」

織斑先生 「相手のバリアーを切り裂いて、本体に直接ダメージを与える。

雪片の特殊能力だ。これは、自分のシールドエネルギーをも攻撃

に転化する機能だ。」

あーなるほど。それで負けたのか。いちかばちかで特攻してシールドエネルギーかなり消費してたからなあ。

織斑先生 「私が第一回モンドグロッソで優勝できたのも、この能力による

ところが多い。」

そんなすごい能力なのか。つか姉弟で受け継ぐのか。

一夏 「そうか、それで白式のシールドエネルギーがいきなり0に・  
・」

山田先生 「ISの戦いは、シールドエネルギーがゼロになった時点で負けとなります。

バリア無効化攻撃は、自分のシールドエネルギーと引き換えに相手にダメー

ジを負わせる。いわば、諸刃の剣ですね。」

織斑先生 「つまりだ、お前の機体は欠陥機だ。」

一夏 「欠陥機？」

織斑先生 「言い方が悪かったな。ISはそもそも完成していないのだから、欠陥も

何もない。お前の機体は、他の機体よりちょっと攻撃特化になっている

ということだ。」

なるほどな。バランスが悪いんだな。一夏の機体は。

山田先生 「あ、あと十五分ほどで、次の試合の開始時間になります。一ノ瀬君の

専用機はこれなんですけど・・・名前がありませんね。

一ノ瀬君、決めて

もらえますか？」

「そうですね・・・」

俺は目の前のISをじっと見た。全体的にミッドナイトブルーの機体だ。

足と手が赤か。まあそれはいいとして、これならこの名前でもいいか。

「『五月雨』にします。」

織斑先生 「よし、すぐに準備しろ。手順は一夏の時と同じように。」

「はい！分かりました！！」

いよいよか。わくわくするぜ。絶対に勝つてやる。

**第五話 クラス代表選 part 1 一夏vsセシリア（後書き）**

第五話終わり。

次回はオリ主のIS設定ですね。

正直全部はできないですけど。

よろしければ感想お願いします。

**専用機 五月雨 設定part1 (前書き)**

展開走甲の扱いを今後どうしようか迷ってます。  
第二形態は、まだ書きません。

## 専用機 五月雨 設定 part 1

第三世代型IS『五月雨』 第三世代型のISに、第四世代型の展開装甲を

白式と同じく試験的に組み込んでいる。  
初期装備は白式と同じ。

一次形態移行後 一対の黄色の翼を開いた状態。これにより、瞬間加速可能。

また、初期設定の時の二倍の速さで動ける。

武器 ビームソードと 基本的にソーラーエネルギーで動く。

サンダーソード 普段は背中に折りたたんで格納してある。

・イメージインターフェースを用いた特殊武器

ファイヤーガトリングガン 毎秒100発の炎の弾を撃つ。  
超高圧水連射砲『夕立』 ナノマシンをかけた水に高圧力をかけ、

毎秒100発撃つ。

(連射可能時間10分)

サンダーガトリングガン 毎秒1000発の雷の弾を撃つ。

シールド シールドの強さは初期状態の3倍。全方位に対応。

単一仕様能力 『エスケープシステム』

五月雨にかけられているリミッターを解除して、

展開装甲に

より、IS自体の性能を格段にアップさせるシステム。IS自体に

ならではの機能である。

直接エネルギーを送り込める。時雨

が追い切れないくらい速い。

スピードはISのハイパーセンサー

なお、『夕立』以外の武器は、外部からのエネルギー補充が可能。

（時雨の場合、自分のエネルギーを直接送り込める。）

第二形態 不明

待機状態 水滴の形をしたペンダント



**専用機 五月雨 設定part1（後書き）**

設定終了。

次回は、いよいよオリ主の試合になります。  
よろしければ、感想よろしくお願いします。

第六話 クラス代表選 part 2 時雨 vs セシリア (前書き)

## 第六話 クラス代表選 part 2 時雨vsセシリア

一夏の時と同じ手順を踏んで『五月雨』に乗った。

一夏 「どうだ？専用機は。」

「問題ない。いける。」

一夏 「そうか。勝ってこい！時雨！」

「ああ、絶対に勝ってくる！」

俺はそう言うと、速攻で空へと飛んで行った。

みんなの応援が聞こえる。お、本音達だ。

本音&癒子&さゆか 「時雨君頑張れーーーー！！！」

ふっ言われなくても頑張るさ。絶対に勝ってやる。

セシリア 「さっきの試合はなかなか苦戦させられましたわ。  
でも、今度はそうはいきませんわよ！」

「望むところだ。かかってこい！」

セシリア 「!!!言われなくてもそうしますわ！」

セシリアがブルー・ティアーズを二基飛ばしてきた。  
更に、レーザーライフルを放ってくる。だが・・・

「問題無く避けられるな。」

レーザーライフルは真正面、ブルー・ティアーズのレーザーは  
死角から飛んでくるようだが、俺の眼はごまかせん。地面すれすれ  
を飛んで避けていく。

セシリア 「やりますわね。でも逃げてばかりじゃ、何もできませ  
んわよ！」

そりゃそうだ。えーっと装備は・・・近接ブレードのみか。  
一夏とおんなじだな。だが俺の場合、剣さえあれば・・・

「触れずとも斬れる。」

半分くらい力を込めて、飛び回る二基ブルー・ティアーズに向かって  
って  
それぞれ剣を左手で振り、ついでにセシリアに向けて斬撃を飛ばした。

セシリア 「!! あなた一体何を。」

「べっつにー? そっちに斬撃を飛ばしただけだ。」

セシリア 「っ! 試験の時といい今といい本当にむちゃくちゃ  
すわね!

「面倒ですわ!!」

セシリアがなおもブルー・ティアーズを二基、更に残った二基か  
ら、  
ミサイルを放ってくる。ブルー・ティアーズのレーザーをさっきと  
同じ  
ように避けながら、ミサイルと二基のブルー・ティアーズを斬り墜  
とし  
ていく。が・・・

セシリア 「こっちも忘れないでいただきたいですわ！」

セシリアがレーザーライフルを放ってくる。それを避けたのだが

「げ！一発避けきれねえか！？」

残っていた一発のミサイルがすぐ近くに迫っていた。ぶつかる直前に

斬り、同時に後ろに飛び退く！直後、爆煙が上がる。

「ふう、何とか避けられたか。危ない危ない。っと安心してる場合じゃねえな。」

俺は、助走をつけ、左足で思いっきり地面を蹴り・・・

『ボコォ！！！！』あ、地面がすっげえ碎けてる。あーやっちゃまった。

セシリア 「！？」

更に五月雨の推進力を利用して亜音速でセシリアの前に現れた。

「そろそろ終わりにしようぜ。セシリア！」

そう言って俺は、セシリアに向けて近接ブレードを振り下ろした。

セシリア 「くっ！やってくれますわね。でもまだですわよ！！」

近接ブレードの一撃ぐらいではシールドエネルギーは0には、ならないか。まあ当然か。セシリアがレーザーライフルを撃とうとする。俺は近接ブレードを捨てた。

セシリア 「あなた一体何を！？」

「言っただろ？『叩き潰してやる』って。」

俺は、入試の時の数倍の振動エネルギーを右拳に込め、シールドの上

から殴った。セシリアはISを纏ったまま、地面に落ちて行った。

試合後、ISを解除した俺だったが・・・両足が痛む。五月雨を纏ったまま急上昇・急加速したからか。半分は自分の足の力でIS

飛んだからなあ。でも、それじゃ中学時代の俺とほとんど変わってね

えや。駄目だな、運動不足。これからまた鍛えなきゃな。

一夏 「やったな時雨って大丈夫か!？」

「大丈夫だ。筋肉痛なんざ一日もたてば無くなる。」

俺は踏み切った左足を引きずりながら、一夏に近付く。

「一夏、俺、第三試合は棄権する。少なくとも半日は足を休めねえと

ISは動かしきれねえからな。」

一夏 「そうか、分かった。あ、肩貸してやろうか？」

「いいよ、自分で歩けるから。」

そうやって俺は、まだ痛む左足を引きずりながら、アリーナを後にした。





## 第六話 クラス代表選 part 2 時雨vsセシリア（後書き）

第六話終了。次回は、クラス代表決定ですね。

のほほんさんとの会話も増やしていこう。

よろしければ、感想お願いします。

## **第七話 クラス代表選 part 3 クラス代表決定（前書き）**

オリ主の I S の設定に一部修正を加えました。  
では、第七話、始まります。

## 第七話 クラス代表選 part 3 クラス代表決定

アリーナを後にした俺がまっすぐに学食に行くと、すでに本音達がいた。混ざらせてもらおうと。

「本音、隣いいか？」

本音 「うん！いいよ。」

ふう。よかったよかった。

さゆか 「左足大丈夫？痛めてるみたいだけど。」

「問題ない。ただの筋肉痛だ。最後飛ぶときの踏切りで少し足を痛めただけだ。」

癒子 「そうなんだ。なんか地面に穴空いてたもんね。」

「いやー参ったよ。やっぱりだめだな、運動不足。」

本音 「あれ、運動不足の人の踏切りじゃないよ。」

「まあ、そう見えるだろうな。」

さゆか 「そうそう、最後の一発は何だったのあれ？普通あれだけで倒されることないと思うんだけど。」

「あーあれね。この際だ、俺らの部屋で教えるよ。あまりまだ知られたくないからな。三人とも来るといい。」

本音 「分かったよーあれ？織斑君には知られてもいいのー？」

「ああ、一夏にはもう知らせてあるから。じゃ、行こうぜ。」

本音&癒子&さゆか 「うんっ！」

さて、本音たちを連れてきたわけだが・・・

一夏 「時雨、本当に教えていいのかよ？」

一夏が心配そうだ。うれしいがいらぬ心配だよ、一夏。

「いいよ。信頼できつからさ。さて、俺がどうやってセシリアを倒したかだが・・・まだ他の奴にばらしたりすんなよ?」

本音&癒子&さゆか  
(コクコクコク！)

「それじゃ言うぞ。実はな、俺は超能力者だ。」

本音&癒子&さゆか  
「  
・  
・  
・  
・  
・  
」

少しの沈黙の後、

「えええええええ！？」

「え!？ それじゃさっきの試合もそれで勝ったの？」

本音  
「そうだったんだ」

「ねえねえ具体的にはどんな能力があるの？」

「エネルギーの吸収・放出・変換・チャージといった所かな。自分で分かっているだけで、電気、光、振動、熱、運動、弾性エネルギーを扱うことができる。まあ、どれだけ貯めこめるかは、俺にも分からねえけどな。」

癒子 「ねえねえ、じゃあ何でIS学園に来たの？」

それ聞かれると痛いな。

「うーん、面白そうだから。ある人に、『お前は女子みたいな見た目だからいけるんじゃないか？』って高校行くか迷ってる時に言われてな。」

これは本当だ。普段ほとんど暇だからってこの学園をボスが紹介したからな。女子みたいな見た目ってのは余計だが。

癒子 「でもどうするの？三人とも一勝一敗で並んでるけど。」

「ああ、それなら俺は辞退するよ。」

本音 「えー！？どうして〜？」

「俺はただ、セシリアの奴に引導を渡したかったただだからな。それにな……」

さゆか 「それに？」

「『男と女が戦争したら三日で終わるって言われてるよ』って言われたのが我慢ならなかったし。この俺を差し置いてな。」

本音&癒子&さゆか 「あはははは……」

癒子 「ごめん、ね。」

「いいよ、別に。分かってくれば。」

一夏 「それにしてもすごいなお前。初期状態のISであれだけ速く動けるなんて。」

「あーまあ、半分くらい踏切りの力だからな。思いつきり力込めてたし。でもそれで筋肉痛だ。運動不足は駄目だな。（笑）」

本音 「そっか。お大事にね。」



「ああ、ありがとな。んじゃ俺これからシャワー浴びるから。また明日な。俺の能力のこと絶対ばらさないでくれよ。」

本音 「うんっ！またね」

本音が笑顔で手を振っている。俺も振り返して着替えとタオルを持ってシャワーを浴びに行った。

さゆか 「織斑君はどうする？」

一夏 「ああ、俺はISの規則覚えなきゃなんないからさ。みんなまた明日な。」

本音&癒子&さゆか 「またねー。」

三人が出て行って、俺と一夏が交互にシャワーを浴び終わった後、俺と一夏はISの規則の書かれた本を必死に読んだのであった。

翌日、どうやら朝からIS飛ばすらしい。筋肉痛は治りきってな

いが

飛ぶくらいはできるだろ、たぶん。

織斑先生 「ではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。

一ノ瀬、織斑、オルコット試しに飛んでみる。」

セシリア 「分かりましたわ」

セシリアがすぐISを呼び出す。やれやれ、俺も呼び出すか。

「行くぞ、『五月雨』」

俺がそう言うのと速攻で五月雨が装着された。速いもんだな。一夏はまだ手間取ってるようだ。お、やっと呼び出した。

織斑先生 「よし。飛べ！」

俺とセシリアは同時に飛んだ。一夏も遅れて飛んできた。お、フォーマット完了？ ああ、ファーストシフトしたか。って速！

セシリア 「!?!? あなたなんで急に速く?」

「たった今、ファーストシフトしたからだと思う。」

織斑 「遅い! スペック上の出力では、白式のほうが上だぞ!」

一夏 「そういわれても・・・自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ? うーよく分かんねえ。」

セシリア 「イメージはしよせんイメージ。自分のやりやすい方法を模索する方が、建設的でしてよ。」

セシリアが一夏の右隣に並ぶ。んじゃ俺は左隣。

一夏 「だいたい、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ? これ。」

まあ慣れるしかないな。っていうか、セシリアの態度がだいぶ柔らかくなってんな、おい。

セシリア 「その、よろしければ放課後に指導して差上げますわよ。」

その時は二人きりで・・・」

織斑先生 「一ノ瀬、織斑、オルコット。急降下と完全停止をやってみせろ。」

「分かりました。」

セシリア 「了解です。では、お先に！」

セシリアが急降下して完全停止する。なるほどあんな感じか。俺も急降下して、地面に着く直前に体勢を立て直し停止する。

一夏 「二人ともうまいもんだな・・・よし、俺も！」

お、一夏が急降下&急停止するみたいだどれどれって!？

一夏 「あ、あ、うわああああああ!!!!!!」

どおおおおおおおお!!!!!!!!!!  
あらら墜ちちゃったよ。失敗か。  
織斑先生と山田先生と篠ノ之さんが駆け寄る。

一夏 「ってえ！死ぬかと思った！」

織斑先生 「馬鹿者！グラウンドに穴をあけてどうする。」

一夏 「すみません・・・」

箒 「情けないぞ！一夏。私が教えたことをまだ覚えていない  
『ドン！』うわっ！！」

セシリアが篠ノ之さんを突き飛ばしたようだ。  
そのまま一夏のそばに駆け寄る。

セシリア 「大丈夫ですか一夏さん！お怪我はなくて！？」

一夏 「あ、ああ。大丈夫だけど・・・って一夏さん！？」

人間、変われば変わるものなんだな。

セシリア 「それはなによりですわ！ああ、でも一応保健室で診てもらったほうがよいですわね！よろしければ私が御一緒・  
」

箒「無用だ。ISをつけた状態で落下して、怪我するわけないだろう。」

セシリア「あら篠ノ之さん？他人を気遣うのは当然のことですよ。」

箒「お前が言うか。この猫かぶりめ！」

セシリア「鬼の皮をかぶっているよりはましですわ。」

箒&セシリア「んう~~~~~~~~!!!!!!」

篠ノ之さんとセシリアが何やら喧嘩しているようだ。どうでもいいが、どちらかといえば鬼の皮より猫の皮をかぶってるほうがましだと思う。確かに。

一夏（この二人、なんでこんなに仲が悪いんだ？）

鷹月 「織斑君、クラス代表決定おめでとー!!」

学食内にて、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』が開かれていた。

次々とクラッカーが打ち鳴らされる。

一夏 「なんで俺がクラス代表なんだよ。」

時雨 「そうだな、俺もてっきりセシリアがなと思ってたよ。」

一夏は篠ノ之さんとセシリアとの間に挟まれて不思議そうな顔をしてる。俺はというと・・・一夏の隣にでも座ろうかと思ったが、こういう状況なので、篠ノ之さんの左隣に座ったら、偶然にも隣に本音が座ってきた。今日はラッキーだ。マジで。そう思っているとセシリアが理由を話し始めた。

セシリア 「それはわたくしが辞退したからですわ。まあ、勝負はあなたの負けでしたが、それは考えてみれば当然のこと。何せわたくしが相手だったのですから。」

一夏 「んう」

セシリア 「しかし、一ノ瀬さんには負けてしまいましたし、大人げなく起こったことを反省しまして、一ノ瀬さんも辞退したということですし、一夏さんにクラス代表を譲る事にしましたの。」

へえ、そっかそっか。まあ、一夏になったならなったで別に何の問題もないな。たぶん、おそらくきつと。

癒子 「いやーセシリア分かってるねえ。」

女生徒B 「そうだよねー。せっかく男子がいるんだから、持ち上げないとねー。」

そんなもんなのか。俺も一応男子だがよく分からんもんだなあ。

箒 「人気者だな、一夏。」

一夏 「そう思うかあ？」

箒 「ふんっ！」

あーあ勝手に起こって勝手にそっぽ向いてるよ。本人は明らかに



困ってるようにしか見えねえのにな。いちいちとげとげしいなあ。

一夏 「なんでそんなに機嫌が悪いんだよ？」

薫子 （カシヤツ）

一夏&箒 「!？」

薫子 「はいはーい!! 新聞部でーす! セシリアちゃんと一ノ瀬君も、写真、いいかな？」

セシリア&俺 「わたくし（俺）もですか？」

薫子 「注目の専用機持ちだからねー。ああ、握手とかしてると、いいかもね。」

セシリア 「そうですか! ああ、撮った写真は、当然頂きますわよね。」

薫子 「そりゃもちろん! ああ、それじゃ立って立って!」

セシリアが立った。一夏と俺も渋々立つ。

薫子 「じゃ、握手してもらえるかなー？あ、三人かあ・・・  
じゃ三人で手を合わせてーほら！もつと笑顔で！緊張しないでー」

一夏、ちよつとかたいぞ。まあ俺も慣れてないから人の事は言えないが。

薫子 「それじゃ、撮るよー。はーい！」

お、撮られるようだ・・・ってええ！？みんな！？

薫子 （カシャツ）

撮られる直前、みんながそばに寄ってきた。俺の左腕には本音がくっついてる。隣に一夏がいたはずが、その間に篠ノ之さんが割り込んでる。

セシリア 「なぜ全員入ってますの！？」

女生徒C 「まあまあ」

癒子 「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

抜け駆けか・・・人気あるなあ、一夏。一夏は苦笑し、セシリアは納得いかなそうな顔をし、篠ノ之さんは、当然だと、堂々としている。

やれやれだ、まあこれでクラス代表決定か。よかったよかった。

（本音と一緒に写れたし。）

## 第七話 クラス代表選 part 3 クラス代表決定（後書き）

さて、第七話終了。次回は、  
セカンド幼馴染登場ですね。

よろしければ感想おねがいします。

第八話 転校生は一夏のセカンド幼馴染（前書き）

## 第八話 転校生は一夏のセカンド幼馴染

癒子 「もうすぐクラス対抗戦だねー。」

ほう。そんなものがあるのか。マジで代表にならなくてよかった。

さゆか 「そうだ、二組のクラス代表が変更になったって聞いている？」

女生徒C 「ああ、何とかって転校生に変わったのよね。」

一夏 「転校生？今の時期に？」

癒子 「うんっ。中国から来た子だって。」

イギリスに続いて中国か。どんなやつだろ。

セシリア 「ふんっ！わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら。」

一夏 「どんなやつだろ、強いのかな。」

鷹月 「今のところ、専用機を持ってるのって、一組と四組だけだから」

余裕だよ。」

??? 「その情報古いよ!」

声のしたほうを見ると、茶髪でツインテールをした女子が、教室の入り口に堂々と立っていた。もしかしてあれか?

??? 「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから!」

へえ、そうなんだ。ファイト! 一夏。

一夏 「リン? お前リンか! ?」

「え? 一夏知り合いなのか! ?」

鈴音 「そうよ! 中国代表候補生、ファンリンイン 凰鈴音!! 今日、宣戦布告に来たってわけ!!」

へえ、こいつが中国代表候補生か。宣戦布告って言うけど、もうすぐ授業が始まるなあ。早く教室に戻った方がいいと思うが。

セシリア 「だ、誰ですの？一夏さんと親しそうに・・・」

一夏 「リン、何かっこつけてんだ？すっげえ似合わないぞ!？」

鈴音 「な、なんてこと言うのよ!! 『ガンッ!』 いったく!!  
何すんの! うわ・・・」

織斑先生 「もうSHRのじかんだぞ。」

鈴音 「ち、千冬さん・・・」

織斑先生 「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ。」

鈴音 「す、すみません・・・またあとで来るからね! 逃げない  
ですよ? 一夏!」

そう言って出て行った。セシリアに続きめんどそうだな。



~~~~~

一夏 「びっくりしたぜ。お前が二組の転校生だとはな。連絡くれれば

よかったのに。」

鈴音 「そんなことしたら劇的な再会が台無しになっちゃうでしょお？」

で、
学食にやってきた俺たちだったが、一夏と鈴音が話しているそば
で、
セシリアと篠ノ之さんが、不機嫌そうな顔をしている。

一夏 「なあ、お前ってまだ千冬姉のこと苦手なのか？」

鈴音 「そ、そんなことないわよ。ちょっと、得意じゃないだけよ。」

それを苦手って言うんだと思うが。まあ、あの人は確かに俺も
ちょっと苦手だけだな。うん。」

一夏 「相変わらずラーメン好きなんだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。」

元気にしてたか？」

鈴音 「げ、元気にしてたわよ。あんたこそ、たまには怪我病氣しなさいよ！」

一夏 「どういう希望だよそりゃ・・・」

同感だな。元気でいて何が悪いんだ。

一夏 「で、いつ代表候補生になったんだよ。」

鈴音 「あんたこそ、ニュースで見たときびっくりしたじゃない！」

一夏 「俺だって、まさかこんな所に入るなんて思わなかったからなあ。」

「そうだな、俺も半分冗談で受験したし。」

俺は成り行きで一夏の右隣に座って聞いていたが、そーいや一夏はどうして入ったんだろ。気にしたことなかったな。

鈴音 「俺もって・・・あんたが二人目の男!? どう見ても女にしか見えないんだけど。」

「それは、入学当初も言われたよ。クラス中に勘違いされてた。あ、俺は一ノ瀬時雨だ。よろしくな。」

鈴音 「よろしく。それでまず一夏、入試の時にISを動かしたやつたんだって？」

「なんでそんなことになっちゃったのよ。」

一夏 「何でって言われてもなあ・・・」

一夏 「高校入試の試験会場が、市立の多目的ホールだったんだよ。そしたら

迷っちゃってさ、係員に聞いてもよくわかんないし、あちこち動き回って

たら、たまたまISを見つけて、触ったら動いちゃって、その後色々あって

この学園に入れられたってわけだ。」

鈴音 「ふーん・・・変な話ねえ。それで、時雨はどうしてそんなことに？」

「ん？ああ、俺はだな、ある人にI S学園に勧められて試験を受けた。何で

受けたかは、まあ・・・気が向いたら話すよ。今はまだ話したくないんでな。」

鈴音 「分かったわ。無理に聞く気はないから。」

物分かりのいい人でよかった。なんて思ってたらせシリアと篠ノ之さんが
やってきた、うわー何か不機嫌そうだ。

箒 「一夏！そろそろ説明してほしいんだが。」

セシリア 「そうですわ一夏さん！もしかしてこちらの方とつつつ付き合っ

てらっしゃるの！？」

鈴音 「べ、べべべつにわたしは・・・」

一夏 「そうだぞ。ただの幼馴染だよ。『むう（鈴音）』ん？どう

かしたか。」

鈴音 「なんでもないわよ!」

あーこれは三人とも一夏が好きなんだな。なんとなく納得した。

箒 「幼馴染?」

一夏 「そうか、ちょうどお前とは入れ違いに転校してきたんだっけな。

篠ノ之箒。前に話しただろ? 箒はファースト幼馴染で、お前はセカ

ンド幼馴染ってとこだ。」

箒 「ファースト・・・」

篠ノ之さんは何だかうれしそうだな。

鈴音 「ふーん・・・初めまして。これからよろしくね。」

箒 「ああ、こちらこそ。」

セシリア 「わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。わたくしは

セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。

一夏さん

とは先日クラス代表の座をかけて争って・・・」

鈴音 「あんた、一組の代表になったんだって？」

一夏 「ああ、成り行きでな。」

鈴音 「よかったら、私が練習見てあげよつか。ISの操縦の。」

一夏 「ああ、そりゃ助かる！」

セシリア 「ってちょっと聞いていらっしゃるの!？」

思いっきり無視されてたな。ドンマイ、セシリア。

鈴音 「ごめん、あたし興味ないから。」

セシリア 「言ってくれますわね。」

箒 「一夏に教えるのは私の役目だ!!」

セシリア 「あなたは二組でしょう! 敵の施しは受けませんわ!!」

鈴音 「あたしは一夏と話してんの! 関係ない人は引っこんでよ。」

箒&セシリア 「んん!!」

セシリア 「あなたこそ! 後から出てきて何をずうずうしいことを!!」

鈴音 「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし。」

箒 「それなら私のほうが早い! 一夏は何度も私の家で食事をして
いる

間柄だ。」

鈴音 「それなら、あたしもそうだけど?」

見ていてとても低レベルな争いだ。付き合いの長さとかでいちいちこだわってどうすんだろうねえ。

鈴音 「一夏はしょっちゅう家に来て食事してたのよ。小学校の頃からね。」

箒 「一夏!! ということだ。聞いてないぞ私は!」

セシリア 「わたくしもですわ!!」

うるせえよ何が悪いんだよ友達と飯食って。

一夏 「え? よくリンの実家の中華料理屋に行ってたただけだ。」

箒 「何? 店なのか。」

セシリア 「お店なら不自然なことは何一つありませんわね。」

一夏 「親父さん、元気にしてるか?」

鈴音 「あ・・・うん。元気だと思う。」

やれやれ、一夏のそばで飯食ってると大変そうだなこれは。
と思っているうちに鐘が鳴った。

鈴音 「じゃあ一夏、放課後に。そっちの練習が終わった頃に行くから。時間あけといてよね！」

一夏 「あ、ああ・・・」

やれやれ、俺も片付けるか。あ、これからあの三人
俺らの部屋に来たりもするんだろなあ。あー面倒だ。

第八話 転校生は一夏のセカンド幼馴染（後書き）

第八話終了。次回はクラス対抗戦&無人機突入ですね。
よろしければ、感想お願いします。

第九話 クラス対抗戦

授業も終わったので、部屋に戻っていたら、一夏がかなり疲れた様子でやってきた。

「お疲れ一夏。」

一夏 「いやー参ったよ。最初筭とISの訓練するつもりがセシリ
アも

入ってきてさ、結局二人相手にした。ボロボロにやられたよ。

」

「あーそれは災難だったな。でもまあ、そのうち相手できるようになるって。IS学園に入ってからまだそんなに経ってないんだからよ。」

」

一夏 「そんなもんかなあ。」

「そんなもんだろ。何事も慣れだよ慣れ。俺だって、ISつけた
まま

戦うのってそんなに楽じゃないんだよ、まだ。大丈夫大丈夫。」

そんなことを言って一夏を励ましてると・・・

鈴音 「一夏あちよっというい？」

鈴音がやってきたようだ。俺が同室なのはまだ知らないか。

一夏 「ああ、いいぜ。」

鈴音 「おじゃましまーす。って時雨が同室だったんだ。」

「ああ。男は俺ら二人だけだから。」

鈴音 「ふーんそれもそっか。あ、そうそう一夏。約束覚えてる？」

一夏 「約束？『一夏、入るぞ。』箒！？」

どうやら、篠ノ之さんも入ってきたようだ。やれやれ。この人も俺の存在を忘れてるようだな。

箒 「何だ話し中だったのか。私のは後でもいいから最後まで話せ。」

一夏 「あ、ああ。それでリン、約束とか言ってたが・・・」

鈴音 「う、うん！あのさ・・・覚えてる、よね？」

一夏 「えっと・・・あれか？リンの料理の腕が上がったら、毎日酢豚を

『そう！！それ！』おごってくれるってやつか？」

鈴音 「はい！？」

もしかして毎日酢豚を食べてやるの間違いか？それって・・・

一夏 「だから、俺に毎日飯をごちそうしてくれるって約束だろ？
いやー一人暮らしの身にはありがたい『バシッ！！』うわ！
え？

鈴音 「さいっつい！！！！」

一夏 「あ、あの、だな・・・リン。」

鈴音 「女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴!!! 犬にかまれて死ね!!!」

一夏 「なんで怒ってんだよ!?! ちゃんと覚えてただろうが!?!」

鈴音 「約束の意味が違うのよ! 意味が!」

一夏 「だから説明してくれよ、どんな意味があるって言うんだ?」

もしかしなくても軽くプロポーズしてんぞ。一夏。それを女の子に説明せんのは酷だと思っぞ。

鈴音 「説明って・・・そんなことできるわけないでしょうが・・・

まあそうだろうな。そこで間をおいて、鈴音は言った。」

鈴音 「じゃあこうしましょう? 来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が

負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられる。」

一夏 「おーいいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな。」

鈴音 「そっちこそ覚悟してなさいよ!!」

そう言つて部屋から出て行つた。一方篠ノ之さんかというと・・・

箒 「一夏。」

一夏 「お、おう。何だ？」

箒 「馬に蹴られて死ね!!」

一夏 「はあ!？」

たいそうご立腹のようだ。ま、当然だな。なんとなく分かった。
一夏は相当な唐変朴のようだ。

「一夏・・・」

「な、何だ、時雨。」

「この部屋でああいう風に騒がれんのマジで迷惑なんだけど。」

一夏 「わ、わりい。」

~~~~~

クラス対抗戦当日、セシリア達と織斑先生と山田先生とともに、  
一夏VS鈴音の試合を見ていたわけだが・・・

「大分押されてんなこりゃ。」

二人とも剣を交えているが、どちらかといえば鈴音のほうが強い。  
つか、あの二本の青龍刀、連結できるんだな。かつけー。

箒 「一夏・・・」

セシリア 「あーもう！！何をしてらっしゃいますの！？わたくしが  
教えて差し上げたクロスグリッターボを使いなさい！」

うっせえなあモニターに向かって叫んでも何も変わんねえよ。  
一方一夏はというと・・・



一夏（このままじゃ、消耗戦になるだけだ。一度距離をとって・・  
」

一夏は距離を取ろうとしているが、離すことができない。

鈴音 「甘い!!」

鈴音が一夏に向けて何か撃った。なんだあれ？

鈴音 「今のはジャブだからね。」

今度は二発だ。避けられず一夏は地面にたたきつけられる。

箒 「なんだ！？今の攻撃は！」

山田先生 「衝撃砲ですね。空間自体に圧力をかけて、

砲弾を打ち出す武器です。」

セシリア 「わたくしのブルー・ティアーズと同じ、第三世代兵器ですわね。」

そうなのか。衝撃砲ねえ。そんなもん初めて見たよ。生身なら俺も撃てないこともないだろうが・・・いかんせん、その前に体を鍛え直さないとなあ。

一夏はというと、起き上がった瞬間に衝撃砲の攻撃を受け、何とか避けている。

鈴音 「よくかわすじゃない。この龍砲は、砲身も砲弾も目に見えない

のが特徴なのに。」

山田先生 「しかも、あの衝撃砲は、砲身の斜角がほぼ制限なしで打てる

ようです。」

セシリア 「つまり、死角がないということですか？」

山田先生 「そういうことになりますね。」

すげえなそれ。後ろ向いても撃てるんだな。いいなあなんて思ってたら一夏が何かするようだ。

一夏 （バリア無効化攻撃か・・・俺に使えるか）

一夏 「リン！！本気で行くからな。」

鈴音 「何よ！！そんなの当たり前じゃない！とにかく、格の違い  
って

ものを見せてあげるわ！！」

鈴音が一夏を追っていく。何すんだろ。

山田先生 「織斑君、何かするつもりですね。」

織斑先生 「イグニッションブースト（瞬間加速）だろう。  
私が教えた。」

セシリア 「イグニッションブースト？」

織斑先生 「一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃  
だ。」

出しどころさえ間違えなければ、あいつでも代表候補生と  
渡り合える。しかし、通用するのは一回だけだ。」

へえーやっぱ代表候補生には一回で見切られるもんなんだな。



## 第九話 クラス対抗戦（後書き）

さて、第九話終了。次回はVS無人機ですね。  
よろしければ、感想よろしくお願いします。

## 第十話 VS 無人機

セシリア 「何！？何が起きたの？」

箒 「一夏！」

山田先生 「システム破損！何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいです。」

織斑先生 「試合中止！！織斑！凰！直ちに退避しろ！！」

一夏 「な、何だ！？何が起こってるんだ？」

鈴音 「一夏！試合は中止よ！すぐにピットに戻って！」

一夏のISに警告が表示される。

一夏 「所属不明のIS？ロックされている？あいつに俺がロックされてるのか？」

鈴音 「一夏。早くピットに！」

一夏 「お前はどするんだよ？」

鈴音 「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!!」

一夏 「逃げるって・・・女を置いてそんなことできるか！」

鈴音 「バカ! あんたのほうが弱いんだからしょうがないでしょ!」  
「？」

一夏 「んう！」

鈴音 「別にあたしも最後までやりあうつもりはないわよ。こんな異常

事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾・・・  
『パシユン!!』」

一夏 「危ない！」

間一髪一夏がビームから鈴音を守ったようだ。危ない危ない。

一夏 「ビーム兵器かよ。しかもセシリアのISより出力が上だ。」

鈴音 「ちょっとバカはなさいよ!! 『お、おい! 暴れるな(一夏)』」

うるさいうるさいうるさい!」

一夏 「バカ、殴るな! 来るぞ!」

敵のISがビーム砲を放ってくる。煙の中からだんだんとISの形が浮かび上がる。

一夏 「なんなんだこいつ、それでもISなのか?・・・お前、何者だ!」

答えろ! お前は何者だ! 何が目的だ!」

全く反応がない、完全無視だ。

山田先生 「織斑君、凰さん! 今すぐアリーナから脱出してください。すぐに

先生達がISで制圧に行きます!」

一夏 「いや、みんなが逃げるまで食い止めないと。」



山田先生 「それは、そうですけど・・・でも、いけません！織斑君！」

セシリア 「一夏さん！」

箒 「一夏！」

一夏 「いいな、リン。」

鈴音 「だ、誰に言ってるのよ。それより離しなさいってば！動けないじゃない！」

一夏 「あ、わりい。」

一夏が鈴音を話す。直後にビームが飛んでくる。更に謎のISが飛んでビームを放ってくるのを一夏達は、次々と避けていく。」

鈴音 「向こうはやる気満々みたいね！」

一夏 「みたいだな！」

鈴音 「一夏！あたしが援護するから、つつこみなさいよ！

武器それしかないんでしょ！」

一夏 「その通りだ。じゃあ、それで行くか！」

難儀なISだなあ。一夏のは。

一夏 「待てえ！！」

山田先生 「もしもし織斑君！？織斑君聞いてます！？凰さんも、  
聞いてます！？」

織斑先生 「本人達がやると言ってるんだから、やらせてみるのも  
いいだろう。」

山田先生 「お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか。  
」

織斑先生 「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからい  
らいらする。」

山田先生 「あの、先生・・・それ、塩ですけど・・・」

織斑先生 「な・・・むう。」

やれやれ。先生もなんだか言って落ち着いてないみたいだな。

セシリア 「先生！わたくしにISの使用許可を！すぐに出撃できます。」

織斑先生 「そうしたいところだが、これを見ろ。」

箒 「遮断シールドが、レベル4に設定！？」

セシリア 「しかも扉が全てロックされて・・・あ！あのISの作業？」

織斑先生 「そのようだ。これでは、避難することも、救援に向かうことも

できない。」

なんというしたたかなISだ。

セシリア 「でしたら！！緊急事態として政府に救援を！」

織斑先生 「やっている。現在も、三年の精鋭がシステムクラック  
実行中だ。

「遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる。  
」

セシリア 「はゝ結局待っていることしかできないんですね。」

織斑先生 「何、どちらにしてもお前は突人体には入れないから安心しろ。」

セシリア 「ええ！？何ですって！？」

織斑先生 「お前のブルー・ティアーズの装備は、一対複数向きだ。  
お前が複数の側に入ると、むしろ邪魔になる。」

セシリア 「そんなことはありませんわ！！このわたくしが邪魔など  
と！」

織斑先生 「では、連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？」

味方の構成は？どのレベルの敵を想定している？連続稼働時間は？」

セシリア 「わ、分かりました！もう結構です。」

織斑先生 「分かればいい。」

さすがのセシリアも、織斑先生にはとても歯が立たないようだ。まあ俺は、常に一国の軍隊を相手にすることを標準レベルにしてるが。

それは今は言えないけど。IS使ってないし。

鈴音 「一夏！！今のうちに！」

一夏 「うおおおおおおお！！！！！！！！」

鈴音が攻撃を受けて少しひるんでいるうちに一夏が突っ込む作戦のようだが・・・避けられている。

鈴音 「一夏のバカ！！ちゃんと狙いなさいよ。これで4回目じゃない！」

一夏 「狙ってるっつーの！（やばい、バリア無効化攻撃は後一回くらい

しか使えない・・・）」

鈴音 「一夏、離脱！」

一夏 「お、おう！」

敵のISがビームを連射してくるのを何とかかわしていく。」

鈴音 「どうすんのよ！何か作戦がなくちゃこいつには勝てないわよ！」

一夏 「逃げたきや逃げてもいいぜ」

鈴音 「誰が逃げるってのよ！あたしはこれでも代表候補生よ！！」

一夏 「そうか、じゃあ俺も、お前の背中くらいは守って見せる。」

鈴音 「あ、ありが、『パシュン！』ひいっ！」

一夏 「集中しろ！」

鈴音 「わ、分かってるわよ!!」

敵のISがビームを連射してくる。次々と避けているうちに、辺りに煙がたち込めていく。

一夏 「なあリン。あいつの動きって、何か機械じみてないか？」

鈴音 「何言ってるの？ISは機械じゃない。」

一夏 「そういうんじゃない．．．あれって本当に人が乗ってるのか？」

鈴音 「人が乗らなきゃISは動かな．．．あ．．．そういえばあれ、

さっきからあたし達が会話しているときは、あんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるように聞いているような．．．」

一夏 「だろ？」

鈴音 「うんうん！でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと

絶対動かない・・・そういうものだもの。」

一夏 「仮に・・・仮にだ。無人機だったらどうだ？」

鈴音 「何？無人機なら勝てるっていうの？」

一夏 「ああ！人が乗ってないなら、容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな！」

鈴音 「全力でって・・・」

一夏 「零落白夜。雪片式型の全力攻撃だ。雪片式型の威力は、恐らく

高すぎるんだ。訓練や学内大戦で全力を出すわけにはいかな

い。  
でも相手が無人機なら、全力で攻撃できる。」

鈴音 「零落白夜だか何だか知らないけど、その攻撃自体が当たらない

じゃない！」



一夏 「次は当てる。」

鈴音 「はー言い切ったわね！じゃあ、そんなことありえないけど、あれが無人機だと仮定して攻めましょうか。」

一夏 「よし、俺が合図したら、あいつに向かって衝撃砲を撃つてくれ。」

最大威力で！」

鈴音 「いいけど、当たらないわよ？」

一夏 「いいんだよ、当たらなくても。じゃあ早速『一夏！』」

箒 「男ならそのくらいの敵に勝てないで何とする！！」

その声に反応した無人機？が箒のほうを向く。

一夏 「まずい！箒、逃げろ！！」

無人機が箒に向かってビームを放とうとする。

一夏 「リン！やれえ！！」

鈴音 「分かった！」

鈴音が衝撃砲を放とうとする。その前に一夏が立ちはだかる。

鈴音 「ちよつとバカ！！何してんのよ！？どきなさい！」

一夏 「いいから撃て！！」

鈴音 「ええ！？あーもう！！！！どうなっても知らないわよ！！」

白式の背中に衝撃砲が直撃し、その力で前進していき、  
『零落白夜使用可能』の表示が出る。一夏が無人機？の  
右腕を切り落とす。しかし・・・

一夏 「うわっ！」

無人機に殴られ、壁にたたきつけられる。そのまま無人機は  
一夏に向けてビームを放とうとする。

一夏 「狙いは？」

セシリア&時雨 「完璧ですわ（だ）。」

ビームと火の弾が無人機に降り注ぐ。

箒 「セシリアに一ノ瀬！」

鈴音 「あんた達いつの間に！？」

一夏 「セシリア、決めろ！」

セシリア 「了解ですわ！！！」

セシリアがレーザーライフルを放つ。見事に無人機に直撃した。

セシリア 「ギリギリのタイミングでしたわ。」

一夏 「セシリアならやれると思っていたさ。」

セシリア 「そ、そうなの!? ま、まあ当然ですわね!」

一夏 「ふゝ何してもこれで終わ『ビービービー』!?」

無人機が再起動したらしいな。

鈴音 「一夏! あいつまだ動いてる!」

一夏 「くっ!! うおおおおおおお!!」

一夏はビームを放ってくる無人機に向けて突っ込んでいった。

## 第十話 VS 無人機（後書き）

第十話終了。

次回は転校生出します。オリキャラも出ます。  
感想よろしくお願いします。

## 第十一話 転校生 part 1

一夏 「ん・・・あれ、時雨？」

「よう、気がついたか。」

一夏 「あのISはどうなった？」

「動かなくなったよ。けが人はお前だけだ。」

「そうか・・・そういや、千冬姉は？」

「ああ、そういやさっきまでセシリア達と一緒にだったぞ。んじゃ、セシリア達も来るだろうから俺は先に部屋に戻る。」

そう言っって俺は保健室を出た。後からセシリア達も入ってきたようだ。

「抜け駆け」とか聞こえる。いやあモテモテだな一夏。

その頃織斑先生は山田先生とともに動かなくなったISを調べてい

た。

山田先生 「やはり無人機ですね。登録されていないコアでした。」

織斑先生 「そうか・・・」

山田先生 「ISのコアは、世界に467個しかありません。でもこのISには

そのどれでもないコアが使われていました。一体・・・」

織斑先生 「・・・」

翌日、朝のHRにて

山田先生 「今日は何と、転校生を紹介します。」

ほう？ 転校生か。どんな奴かな？

??? 「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさん、よろしくお願いします。」

癒子 「お、男？」

シャルル 「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、  
本国から転入を・・・」

クラス中の女子 「キャアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

なんだようるせえなあ耳に響くじゃねえか。つか三人目の男？  
いや、一応『視える』からわかるんだがあれって・・・まあいっか。  
気にしたら負けだ（笑）

織斑先生 「あー騒ぐな、静かにしろ！もう一人が入りにくいだろう。」

山田先生 「あのー織斑先生・・・」

織斑先生 「どうかしましたか、山田先生。」

山田先生 「そのもう一人がどうも教室の外にいないんですけど・・・」



織斑先生 「何？さっきまでいたんだが・・・」

??? 「すみません。ちょっとトイレに行ってて遅れました。」

ん！？ この声は確か機関にいた・・・ってえ！？

??? 「えっと、デンマークから来ました。アーサー・クリステンセンです。」

みなさん、よろしくお願いします。」

なぜに！？さてはボスめ、俺だけじゃ飽き足らずこいつも炊きつけたのか？

クラスの女子 「キャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

これは仕方ない騒いでも仕方ない。この男は憎たらしいほどの身長180センチオーバーの金髪イケメンだからな。

織斑先生 「あーだから騒ぐな！静かにしろ！！今日は二組と合同で、IS実習

を行う。各人はすぐに着替えて、第二グラウンドに集合。  
それから

織斑、一ノ瀬。」

一夏&時雨 「はい。」

織斑先生 「織斑はデュノア、一ノ瀬はクリステンセンの面倒を見てやれ。」

同じ男子同士だ。解散！」

さあて、早めに着替えるとしますかね。

## 第十一話 転校生 part 1 (後書き)

第十一話終了。次回はIS実習ですね。  
よろしければ感想お願いします。

## オリキャラ設定二人目（前書き）

I S 実習の前にオリキャラの設定です。

## オリキャラ設定二人目

氏名 アーサー・クリステンセン (デンマーク)

性別 男

身長 182 cm

体重 70 kg

誕生日 3月14日

血液型 B型

人物 両目が水色、金髪ショートヘアで長身のイケメン。

時雨と同じく両親を亡くしているが、原因は不明。

時雨と同じ機関所属の超能力者。

基本的に陽気な性格だが、切れると時雨以上に危険。

中学在学中に国際指名手配犯を逮捕したことで機関に入る。しかし、暇だったため中学卒業と同時にデンマーク国内のIS関連企業に入り、ISに触ったところ動いてしまった。そのため、急遽デンマーク代表候補生になり、機関のボスからの後押しもあり、IS学園に入ることになった。

超能力

? 時雨と同じく、光をエネルギーとすることができる。

? 大気を操ることができる。(圧縮や揚力発生など)

? 全身雷人間(この能力単体なら時雨より上)

これら以外にもあると思われるがまだ不明。

専用IS 『スターダスト』 第三世代IS。機体の色はエメラルド色。

一次形態 白い一对の翼を開いた状態で、五月雨と同じくこれで瞬間加速ができる。

武器 ビームソード4本 背中に格納されている。動力は太陽光。

・イメージインターフェースを用いた武器

フレイムバズーカ

ビームガトリングガン

超高压空気連射砲 『ストーム』

シールドの強さは標準の三倍、全方位に対応。

単一仕様能力 『コメット』

スピードは五月雨のエスケープシステムと同じくら

い。

全ての武器の威力が通常の三倍になる。

また、常にシールドエネルギーを外部から取り込め

る。

（通常は太陽光だけだが、アーサーの場合は電気も）

第二形態 不明

待機状態 銀色のブレスレット

## オリキャラ設定二人目（後書き）

オリキャラ設定終了。何とか終わりました。

## 第十二話　IS実習

シャルル　「何でこんなに女子が追ってくるの？」

俺たちはこれからIS実習のため着替えに行く最中なんだが不思議そうに、シャルルがきいてきたのに対し、一夏ときたら

一夏　「男子が珍しいからだよ。」

などと能天気なことを……

「それだけじゃない。。半分以上は一夏とアーサーが原因だよ。お前らテライケメンすぎるんだ。特にアーサー。」

アーサー　「悪いな、時雨。」

「別いいけどよ。ほら、早く着替えねえと遅れちまう。」

一夏　「そうだな、遅れたら千冬姉からの制裁が待ってるからな。」

アーサー　「どのくらいすごいんだ？」



着替えながら興味津津で聞いてくるアーサー。

「ああ、出席簿にしろげんこつにしろ、間違いなく覇気がこもってるよ」

アーサー 「ああ・・・なら俺らにも効くな、きつと。」

一夏 「ところでそのスーツ、着やすそうだな。」

シャルル 「ああ、これデュノア社製のオリジナルだよ。」

一夏 「デュノア？お前の名字もデュノアだよな。」

シャルル 「父が社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う。」

アーサー 「そうなのか。俺はデンマークのIS企業に勤めてた関係で

ISを起動しちゃったんだよ。」

一夏 「え！中学卒業してすぐに就職したのか！？ていうか社長の息子だったんだな、シャルルって。どおりでな。」

シャルル 「どおりでって？」

一夏 「なんつーかさ、気品っていうか、いいところの育ちって感じがするじゃん？納得した。」

シャルル 「……」

何か黙ってしまったようだ。あまり触れてほしくないんだろうか。

織斑先生 「本日から実習を開始する。まずは戦闘を実演してもらおう。」

凰、オルコット！

鈴音&オルコット 「はい！」

織斑先生 「専用機持ちなら、すぐに始められるだろう。前に出る！」

鈴音 「めんどいなあ。なんであたしが。」

セシリア 「はーなんかこういうのは見世物のようで気が進みませんわね。」

二人とも嫌そうである。まあ仕方ないだろうよ。

織斑 「お前ら少しはやる気を出せ。あいつにいいところを見せられるぞ？」

鈴音&オルコット 「!!」

セシリア 「やはりここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの

出番ですわね！」

鈴音 「実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの。」

あからさまに反応が変わったな。一夏のことになると見違えるぜ。

セシリア 「それでお相手は？ リンさんとの勝負でもかまいませんが。」

鈴音 「こっちのセリフ。返り討ちよ！」

織斑先生 「あわてるなバカども。対戦相手は……」

「わーーーーー！！！！どいてくださーーーーい  
 ！！！！！！」

緑色のISが空から降ってきて・・・

「わあああああああ……！！！！！！！！」

**ドオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!**

一夏の上に降ってきた。大丈夫かな？

山田先生  
「あの一織斑君？」

「ん？ うわあああああ！！！！」

一夏が山田先生の胸を触っていたようだ。これはまずいような気が・  
・

『バシユン!!』

一夏の横からビームが飛んできた。あーこれは・・

セシリア 「残念です。外してしまいましたわ。」

セシリア かやっぱり。何か笑顔で切れている。

鈴音 「一夏ああああああ!!!!」

青龍刀が飛んできた。あ、これ一夏に直撃するかな？

『ドオン! ドオン!』

山田先生が青龍刀を撃ち落としたようだ。危なかったなあ

山田先生 「織斑君、けがはありませんか？」

一夏 「は、はい・・・ありがとうございます。」

固まってんなあ一夏。まあビームと青龍刀だもんな、そりゃ怖い  
わ。  
つか生身の人間にビームとか刀とか放つなよ。当たったらどうすんだ。

織斑先生 「山田先生は元代表候補だ。今くらいの射撃は造作もない。」

山田先生 「昔のことですよ。それに候補生どまりでしたし。」

織斑先生 「さて小娘ども。さっさと始めるぞ。」

セシリア 「え？あの、二対一で？」

鈴音 「いやさすがにそれは・・・」

織斑先生 「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける。では・・・  
はじめ！！」

セシリアと鈴音と山田先生が飛び立っていった。結果は・・・

セシリア 「うう、まさかこのわたくしが・・・」

鈴音 「あんたねえ！何面白いように回避先読まれてるのよ！！」

セシリア 「リンさんこそ、無駄にばかすかと撃つからいけないのですわ！！」

見事にやられたようだ。ドンマイとしか言いようがないな。

織斑先生 「これで諸君にも、教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を

もって接するように。次に、グループになって実習を行う。リーダー

は専用機持ちがやること。では別れろ！！」

やれやれ、どのグループにするかなあ。

本音 「時雨君こっちのグループでやろ」

本音達か。一番無難だ見知った顔で。

「分かった。そっちに行くよー。」

それからほとんど問題なくIS実習は進んでいった。

（コクピットを戻し忘れたことで篠ノ之さんが一夏にお姫様だっこしてもらって

それに便乗したグループの女子の要望で同じようにする羽目になったが。）



## 第十二話 IS実習(後書き)

第十二話終了。次は転校生 part 2ですね。  
よろしければ感想よろしくお願いします。

### 第十三話 転校生 part 2

IS実習も終わり、学食で昼ごはんを食べているわけだが・・・

アーサー 「どうでもいいが、時雨は一夏と一緒に食ったりしないのか？」

「ああ、一夏と一緒に食おうとすると必ず篠ノ之さんか代表候補生の  
奴らが来るんだよ。あいつら全員一夏のことが好きみたいだから  
な。

邪魔するのは無粋というもんだよ。」

アーサー 「あーなるほどな。」

本音 「まあ、おりむーは全く気付いてないみたいだけどね」

「その通りだ。奴は女子が勘違いするようなことばっか言うのにな。」

アーサー 「日本で言う、朴念仁だっけ唐変朴だっけ？」

さゆか 「どっちでも合ってるよ。」

癒子 「アーサー君もモテるよね。お昼結構誘われたでしょ。」

アーサー 「まあな。でも、最初は時雨と食おうと思ってたからな。それに、時雨の友達に悪い人はいないし。」

本音 「わ！信用されてるよ私達。全幅の信頼を寄せられてるよ。」

「あ、そうだアーサー。本音達なら能力のことばらしても大丈夫だから。」

アーサー 「なんだと！？お前ばらしたのか？」

「まあ、入学試験のことで織斑先生に最初に言った。弟の一夏にも。」

アーサー 「そうか、じゃあばらしても大丈夫か。」

癒子 「アーサー君も超能力者なの？」

アーサー 「まあな。主に電気だけど。」

さゆか 「そうなんだ。二人ともすごいんだね。」

アーサー 「んなこと言われたのは初めてだよ。母国では忌み嫌われてたし。」

「そうか、お前も苦労したんだな。」

本音 「ところで時雨君。アーサー君とは知り合いなのかい？」

「アメリカで会った友達だよ。色々あってな。」

アーサー 「そういうことだ。まあ俺はあれから中学卒業してIS関連の企業に

就職したわけなんだが。」

癒子 「そっか。でも何でそれでIS学園に来たの？」

アーサー 「仕事の関係で訓練機を目にすることが多かったんだ。休みの日に

暇つぶしに触ってみたら動いちまった。そんでもってあ

れよあれよ

のうちにこの学園に送り込まれた。」

さゆか 「それは大変だったね。」

アーサー 「そうでもないよ。流れに身を任せただけだったし。」

「だが、専用機持ちとして入学してきたんだ。これから大変だぞ。」

アーサー 「どういうことだ？」

「この前正体不明のI Sが襲ってきたんだよ。そういうのを相手に戦うこと

だってあるんだよ、俺らは。」

アーサー 「あーそっか。めんどいな。」

本音 「そだねー。でも何とかなと思うより、時雨君たちなら。」

「ん、そうだな・・・ってそろそろ授業始まるな。アーサー、行こうぜ。」

アーサー 「ああ、そろそろ行くか。」

本音 「あ、私たちも行く」

こうして昼休みが終わり、午後の授業が始ま・・・

山田先生 「えーっと・・・今日もうれしいお知らせがあります。  
また一人

ラウラ ・ クラスにお友達が増えました。ドイツから来た転校生の、

ボーデヴィツヒさんです。」

らなかった。また転校生か。今度は女子なんだな。なんかぶすつと  
してるけど。

織斑先生 「あいさつをしろ、ラウラ。」

ラウラ 「はい、教官。」

教官！？ ってことは織斑先生と知り合いなんだな。

ラウラ 「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

それから黙ってしまった。え、終わり？

山田先生 「あ、あの・・・以上ですか？」

ラウラ 「以上だ。」

以上なのか。篠ノ之さんぐらいキリツとしている。

ラウラ 「貴様が・・・」

ん？一夏のほうに近づいて行ったな。一夏も知り合いなのか？

ラウラ 『バシッ！！』

ラウラがいきなり一夏の頬をたたいた。おいおい何なんだよ一体。

ラウラ 「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

やれやれ、また意味わかんないのが来たようだ。



## 第十三話 転校生 part 2 (後書き)

第十三話終了。

よろしければ感想よろしくお願いします。

## 第十四話 「カミングアウトしまくる」

「アーサー、射撃武器の練習しようぜ。」

アーサー 「そうだな、早く慣れておかないとな。俺らあんまり武器使った事ないし。」

「つか、今まで戦う時は生身が多かったしなあ。実戦で武器使うのって

IS装着したときぐらいだよな、俺らって。」

アーサー 「訓練でも久しいよな。あんどきハワイで撃った時以来だ。」

「まあな・・・お？一夏がセシリア達に教わってるみたいだな。」

アーサー 「だが本人は理解が今一つみたいだぞ。」

箒 「こうズバーっとやってから、ガキン！ドカーン！！という感じだ。」

鈴音 「なんとなく分かるでしょ？感覚よ感覚・・・はあ！？なんで

分かんないのよ！バカ！！」

セシリア 「防御の時は右半身を斜め上、前方に五度。回避の時は後方に二十度ですわ！！」

「率直に言わせてもらおう。全然分からん！！」

「あの説明じゃ全然分からねえよ。漠然かつ抽象的すぎる。」

アーサー 「ISを扱うのは上手だが、教えるのは下手か。」

アーサー 「だからと言って回避・防御を教えるつつてもなあ・・・俺ら基本

回避とか防御とか慣れてねえもんだから何とも言えねえや。」

アーサー 「同感だ。」

「つか騒がしくなってきたな。何なんだ？」

アーサー 「一夏とシャルルが戦うらしい。」

「へえ、さてどんなもんかな？」

こうしてぼーっと俺達は戦いの模様を眺めていたわけだが……

アーサー 「惨敗か……」

「ドンマイ、一夏。」

アーサー 「射撃訓練、やろうぜ。」

「そうだな、さっさとやっちまおう。」

射撃訓練はほとんどが真ん中を撃てた。しかし……

アーサー 「鈍ったな……」

「ああ、しばらくやってなかったからな。でも上出来な方だろ。」

アーサー 「ゴルゴみたいに百発百中になりてえ……」

「ははは、まあ頑張ればやれるよきつと。」

そんなことを話しているとまた騒がしくなってきた。何だ今度は？

アーサー 「どうやら、ドイツのやつが来たらしいぞ。名前はラウラ・・・」

何だっけ？」

「ああ、ラウラ・ボーデヴィツヒな。」

アーサー 「ああ、そんな名前だっけ。いやー朝は半分寝てたからな・・・」

「朝は少々低血圧なのは相変わらずか。」

アーサー 「まあな、目覚ましあるから何とか起きられるが。」

セシリア 「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」

鈴音 「何、あいつなの！？一夏をひっぱたいた代表候補生って。」

ラウラ 「織斑一夏。」

一夏 「何だよ。」

ラウラ 「貴様も専用気持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え。」

一夏 「嫌だ。理由がねえよ。」

ラウラ 「貴様になくても私にはある。」

一夏 「今でなくてもいいだろう？もうすぐクラスリーグマッチなんだから、その時で。」

ラウラ 「ならば・・・」

ラウラがいきなり、なんかぶっ放してきた。問答無用だなおい。

シャルル 「フッ！」

おー跳ね返した。やるなあ。

一夏 「シャルル！」

シャルル 「いきなり戦いを仕掛けるなんて、ドイツの人はずいぶん  
沸点が低いんだね！」

ラウラ 「フランスの第二世代型ごときで、私の前に  
立ち塞がるとはな。」

シャルル 「いまだに量産化のめどが立たない、ドイツの第三世代型  
よりは動けるだろうからね。」

??? 「その生徒！なにをやっている！」

ラウラ 「ふん、今日のところは引いてやろう。」

ラウラはそう言って、ISを解除して去って行った。

~~~~~

一夏 「あのさ、今日変なことがあったんだよ。」

アーサー 「変なこと？」

俺たちはアーサーとシャルルの部屋に集まっていた。シャルルはシャワーを浴びているようだ。

一夏 「ああ、シャルルがいつも更衣室で着替えないから、たまには一緒に着替えようぜって言ったら、叫び声をあげて走ってっ
ちゃ

ったんだ。どう思う？」

アーサー 「着替える時に見られたくないものでもあったんじゃない？
ていうか別に一緒に着替えなくてもいいだろ。気にする
な。」

アーサーはのんきに返している。いやまあ・・・
一応俺は何でかわかるが。

アーサー 「む、ちょっとトイレ行ってくるな。あ、たしかボディ
ソープ
切れてたと思うから、お前らどっちかシャルルに渡しと
いて。」

一夏 「ああ、分かった。時雨、俺行ってくるから。」

「ああ、分かった。」

一夏がボディソープを渡しに浴室へ……ってやばい！

俺は自分の見落としに気づき、一夏を追っていったが時すでに遅し。

一夏はもう見てしまった。シャルルの本当の姿を。

アーサー 「何があったんだお前ら。」

一夏&時雨&シャルル 「……」

長い沈黙が続いている。が、それを破ったのは一夏だった。

一夏 「その……お茶でも飲むか。」

シャルル 「うん……もらおうかな。」

一夏はお茶を取りに行ったようだ。さて……

アーサー「どういふことなんだ、これ？」

アーサーがひそひそとささやいてきた。まあ、気になるよな。

「ああ、実はな・・・」

アーサー「ええ！？お前『視えてた』のになんて言わなかった。」

「あんまり騒ぎになるとまずいだろ？なんか事情がありそうだし。」

一夏「はい・・・」

シャルル「あ、ありがとう・・・ふぁー！！」

一夏「！？何やってんだよ、アチ！アチチ！

どうやらシャルルがお茶を取り損ねたようだ。

アーサー「早く冷やせ！」

一夏 「ああ、分かってる！」

シャルル 「ごめん！ちよつとみせて？ああ、赤くなってる！ほんとに

ごめんね？」

一夏 「いや、たいしたことないっ・・・あの、当たってるんだが・・・」

シャルル 「!？」

一夏の腕に自分の胸が当たっていることに気づいたようだ。
あわてて離れる。

シャルル 「一夏のエッチ・・・」

一夏 「なんでだよ！」

アーサー 「おいおい、男なら気にするだろうが。」

「同感だな。」

一夏 「で？なんで男のふりなんかしてたんだよ。」

シャルル 「・・・実家からそうしろって言われて。」

一夏 「お前の実家っていうと・・・デュノア社の。」

シャルル 「そう、僕の父がその社長。その人からの直接の命令だね。」

一夏 「え？」

シャルル 「三人ともよく聞いて。僕はね・・・父の本妻の子じゃないんだよ。」

一夏&時雨&アーサー 「!？」

シャルル 「父とはずっと別々に暮らしてたんだけど、二年前に引き取られたんだ・・・そう、お母さんが亡くなった時、デュノアの人が迎えに来てね、それで、いろいろな検査を

公式

受ける過程で、IS適性が高いことがわかって、で、非

ね、

ではあるけれど、テストパイロットをやることになって

のは

でも、父と会ったのはたったの二回だけ・・・話をした

一時間にも満たないかな・・・そのあとのことだよ、経

営危機

に陥ったんだ。」

一夏 「え！？だってデュノア社って、量産機のISシェアが世界
第三位

だろ？」

シャルル

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。

現在、

ISの研究は、第三世代型の開発が主流になってるんだ。

セシ

リアさんやラウラさんが転入してきたのも、そのための

データを

とる必要からだと思う。」

アーサー

「そうか・・・じゃ俺もなんだな。」

シャルル
なか

「あそこも、第三世代型の開発に着手はしてるんだけど、

奪されて

なか形にならなくて・・・このままだと、開発許可が剥
しまうんだ。」

一夏 「それと、お前が男のふりしてんのと、どう関係があるんだ
？」

シャルル 「簡単だよ、注目を浴びるための広告塔。それに男子な
ら、

体と
日本に出現した特異ケースと接触しやすい。その使用機
体と

盗人
本人のデータもとれるかもってね。そう、君のデータを
盗人
で来いって言われているんだよ。僕はあの人にね。」

一夏&時雨&アーサー 「・・・」

シャルル 「はあ・・・本当のこと話したら楽になったよ。聞いて
ん。
くれてありがとう。それと、今まで嘘をついていてごめ
ん。」

一夏 「いいのか？」

シャルル 「え？」

一夏 「それでいいのか！？いいはずないだろ！」

シャルル 「一夏！？」

一夏 「親がいなけりゃ子供は生まれない・・・そりゃそうだろうよ！」

でもだからって何をしてもいいってわけないだろう！」

シャルル 「一夏・・・」

一夏 「俺と千冬姉も、両親に捨てられたから・・・俺のことはいい！」

今更会いたいとも思わない。だけど、お前はその後どうするんだ。」

シャルル 「どうって・・・女だってことがばれたから、きっと本国へ

呼び戻されるだろうね。後のことは分からない。よくて牢屋

行きかな・・・」

「だったらここにいろ！俺ら三人が黙っていればそれで済む。」

アーサー 「もしばれても、お前の父親や会社にも、手出しできないはずだ。そうだよな一夏？」

一夏 「ああ、IS学園特記事項、『本学園における生徒は、その在学中

において、ありとあらゆる国家、団体に帰属しない。』つまりこの

学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だ。その間に何か方法を考

えればいい。」

シャルル 「よく覚えてたね、特記事項って五十五個もあるのに。」

一夏 「こう見えても勤勉なんだよ。」

「あ、それとなシャルル。」

シャルル 「何？時雨。」

「この際だから話すよ。俺とアーサーの秘密をさ。」

アーサー 「おい！ばらして大丈夫なのか？」

「いいさ、シャルルも話してくれたんだ。俺らもカミングアウトしようぜ。」

こうして俺はシャルルと一夏に俺たちが超能力者であること、そして俺たちが国連の機関に所属していることを話した。」

一夏 「マジかよ！？ほんとにそのボスの思い付きで派遣されてきたのか？」

シャルル 「ちなみに、時雨はそれでいいとして、アーサーは何で？」

アーサー 「ああ、さっき時雨が言ったと思うけど、俺たち基本普段暇だからさ。俺はIS関連の企業に就職して・・・

アーサーが話しているのを一夏とシャルルが興味津々に聞いている。

シャルル 「そうなんだ。二人とも大変だったんだね。」

「まあな。でもまあ、そういうわけだから、卒業しても何とかな

るよ

「お前の父親がなんかしてきても俺らが総動員でかかっていくから。」

シャルル 「でも、大丈夫なの？特にその・・・ボスとかいう人がそれを許してくれるかなあ・・・」

アーサー 「心配すんな。大抵のことは数秒で了承する人だから。俺とアーサーの関係者なら間違いなく協力するさ。」

一夏 「しかし、その機関つてのもさすがに軍とかが相手だと、まずいんじゃないか？」

「ああ、確かに機関のメンバー全員が俺らみたいに大抵の物理的攻撃が効かないってわけじゃねえよ。」

一夏 「じゃあやっぱり・・・」

アーサー 「いやいや、その時はたぶん俺と時雨とボスとで充分。」

シャルル 「それはいくらなんでもなめすぎだと思うよ・・・」

「一応言っておくぞ。」

一夏&シャルル 「？」

「俺達は単独で一個の軍隊相手できるから大丈夫。たとえばそれがアメリカだろうがロシアだろうがな。」

シャルル 「えー！？それはないよさすがに。」

一夏 「ああ、いくらなんでも・・・」

アーサー 「いや、本当だって。」

シャルル 「それじゃISを装着する必要がないよー」

「その通り。俺らにとってISは逆に足かせになるんだ。俺らの能力を軽減するためのな。」

一夏 「じゃあ、IS学園にいる意味がないんじゃないか？」

アーサー 「そうでもないよ。俺らは自分の能力を使わずに人を倒

せる

「というからＩＳ学園に来ようと思ったんだ。」

「そうそう。ボスに言われたのも理由の一つだけど、俺達はあくまで

犯罪者を逮捕したいんだよ。能力の加減をミスって相手を殺してしま

うのはできれば避けたいから、加減がしやすいＩＳのことを学びに来た

んだ。」

シャルル 「そうなんだ。あ、でもこのこと・・・」

一夏 「そうだ。秘密にしておいて欲しいんだよね？」

アーサー 「ああ。その代わり俺らもシャルルの秘密を守るからさ。」

「そういうわけだ、よろしく頼んだぞ。一夏、シャルル。」

シャルル 「うん！分かった。」

「まあいざればらすけどさ。本音達とかには。」

アーサー 「あと、その無人機みたいなのが襲ってきたときとかに
他の専用機持ちとかにもな。」

一夏 「そっか、いざとなったら役に立つもんな。」

「だからってそんなときに手抜くんじゃねえぞ、一夏。」

一夏 「あ、ああ・・・分かってるよ。」

そんなことを言っていると・・・

セシリア 「一夏さんいますか？」

アーサー 「あ、やばいぞ！」

「と、とにかくベッドの中に！」

シャルル 「う、うん！」

危ない危ない。ばれるところだったぜ・・・

第十四話 「カミングアウトしまくる」 (後書き)

第十四話終了。

感想よろしくお願いします。

第十五話 シャルルやばい（アーサー）

（アーサーSIDE）

「ふう・・・シャルル、とりあえず晩飯持ってきた。」

シャルル 「あ、ありがとう・・・」

なんとかセシリアをごまかせて正直ほっとしている。
ばれたらなにされっかわかんねえからなあ。

「さっきは危なかったな、ばれるとこだったぜ。」

シャルル 「うん・・・!？」

「どうかしたか？」

シャルル 「あ、いや・・・」

どうやら箸が苦手のようにだ。俺は時雨に教えられたから
大丈夫なんだがな・・・最初はこんな感じだったっけ。

「もしかして、箸苦手か？」

シャルル 「練習してはいるんだけどね・・・」

「悪い。俺箸慣れてたからついな。フォーク持ってくるよ。」

シャルル 「え！？そんな、いいよ・・・」

「いって、シャルルもたまには他人に甘えてみ？遠慮ばっかだと損するからな・・・そうだな、まずは俺を頼ることから始めてみたらどうだ？」

シャルル 「・・・」

少し沈黙。なんかもじもじしだした。あれ？俺なんか変なこと言っただけかな。

シャルル 「じゃ、じゃあさ・・・」

「ん？」

シャルル 「アーサーが食べさせて・・・」

「え？」

まさか俺にあの伝説の『あーん』をやれというのか？

シャルル 「甘えてもいいって言ったから・・・だめ？」

その目は反則だろそんなうるうるした目で見られたら断れねえよ。

「わ、分かった。それじゃ・・・」

まず焼き魚をつまんでシャルルの口元へ・・・

「それじゃいくぞ、あーん・・・」

シャルル 「あーん・・・」

シャルルがゆっくりと食べていく・・・さて・・・

「ど、どうだ。うまいか？」

シャルル 「おいしい！」

「そっか！よかったよかった。」

シャルル 「その・・・次はご飯がいいな。」

「あ、ああ！飯か。んじゃいくぞ・・・あーん。」

シャルル 「あーん・・・」

何これすっげえ癒されんだけど、今度時雨に相談しよう。
奴なら分かってくれるはず、癒し系好きだからな。

「あ、ご飯粒ついてんぞ。」

シャルル 「とって？」

「!?!? しよ、しょうがないなあ。」

晩飯が終わるまで『あーん』は続いたのであった。
正直やばい。シャルルやばい。

第十五話 シャルルやばい（アーサー）（後書き）

第十五話終了。

よろしければ感想お願いします。

第十六話 クラスリーグマッチで組む相手決定！（時雨） なん・・・だと（一

さてさて、セシリアが一夏と話している間に俺は
学食に来たわけであったが・・・

「クラスリーグマッチ誰と組むかな・・・」

順当にいけば残りの男子三人のどれかと組むことになるんだろう
が、
それではつまらない。専用機持ち同士で組むんじゃない。そんなことを
思っていると見知った顔がいた。

「本音、隣いいか？」

本音 「うん！いいよ」

癒子 「あれ？織斑君達は？」

「ああ、一夏はセシリアと篠ノ之さんに拉致られてった。あと、
シャルルが風邪気味だからアーサーがシャルルの分の晩飯持っ
ったはず。」

さゆか 「そうなんだ。デュノア君大丈夫だった？」

「熱は出てなかったみたいだから大丈夫だ。あ、そうだ。三人ともクラスリーグマッチで組む人もう決まっちゃったりしてる？」

癒子 「私はさゆかと組むことにしたから。」

さゆか 「そうそう。本音はまだだったよね？」

本音 「うん、まだだよ」

「あ、そうなのか。じゃあ、一緒に組まないか？」

本音 「いいよ」

癒子 「あれ、織斑君達もう組む人決まってるの？」

「いや、まだだろうけど専用機持ち同士で組むのは面白くないしな。」

本音 「そっか。でも、私なんかでいいの？足ひっぱっちゃうよ

」?」

「気にすんな。全力でフォローしてやる。(キリッ)」

さゆか 「ラウラさん達と当たらないことを祈るよ・・・」

「俺もできればその前に一夏達に倒してもらいたいぜ。」

本音 「そうだね」

「まあ当たったら当たったで勝ちに行くよ。」

本音 「うん、よろしくね」

さゆか 「うれしそうだね一ノ瀬君。」

「ああ、うれしいに決まっているじゃないか! (キリッ)」

本音 「即答したよ」

それからちやっちゃんと夕食を済ませて部屋に戻ってきた俺だった
が・・・

「どうした一夏。」

一夏 「ああ、時雨か。いや、気にしないでくれ・・・」

何か一夏が疲れていた。まあ・・・しかたないか。

「そうか、ならいいが・・・そうそう、俺クラスリーグマッチで
組む相手

本音に決まったぞ。」

一夏 「なん・・・だと」

「シャルルと組むつもりなら、早めに言ったほうがいいぞ。おそ
らく

アーサーも狙ってるだろうからな。」

一夏 「そっか・・・じゃあ明日にでも聞いてみるか。」

まあ・・・すでに手遅れかもしれんが。

第十六話 クラスリーグマッチで組む相手決定! (時雨) なん・・・だと (一)

第十六話終了

よろしければ感想よろしくお願いします。

第十七話 クラスリーグマッチに向けて（前書き）

少し設定変えて、模擬戦は二人で組むことは
少し前のほうで決まってることにしました^^

第十七話 クラスリーグマッチに向けて

一夏達より少し遅れて俺とアーサーと本音がアリーナに向かった所、

派手にアリーナのバリアーが派手にぶっ壊れている。

「篠ノ之さん！なにがあったんだ？」

箒 「ああ、ラウラがセシリアとリンを一方的に攻撃してるところを一夏とシャルルが止めに行ったんだ。」

アーサー 「だが、見たところ一夏はあの黒いISに攻撃を完全に止められてるみたいだな。」

本音 「みたいだね。あれって何なんだろう？」

「ああ、シールドじゃなくて結界だからな。AICだっけ？」

アーサー 「アクティブ・イナーシャル・キャンセラーだよな。」

あ、やべえぞシャルルがワイヤーに捕まった！」

「そうか、んじゃ俺らも止めに行くか。」

アーサー 「ああ！これ以上けが人を増やすわけにはいかん。」

箒 「だが！A I Cはどうするんだ？」

「あんなものどうせ同時に二方向にはできねえだろ。」

アーサー 「ああ、その間後ろはガラ空きだ。」

「んじゃ行こうぜ！」

アーサー 「ああ！」

本音 「頑張って。」

すぐにI Sを展開して俺達は飛んでったわけだが・・・

アーサー 「どっから攻める？」

「先に前を攻めて、少し遅れて後ろを攻めればいいだろ。俺は後ろ、アーサーは前だ。」

アーサー 「了解。」

アーサーが速攻でビームソードを振りかざす。案の定AICシャルルの射撃とともに止められたようだ。だが・・・

「後ろがガラ空きだ。」

少し遅れてラウラの背後に近付く。

ラウラ 「面白い！世代差というものを見せつけてやろう。」

やれやれ。何言ってるんだか。あんまりなめちやいかんよ。

ラウラ 「行くぞ！」

ラウラがプラズマ手刀をシャルルに振りかざし・・・

??? 『キーン!!』

ラウラ 「教官!？」

織斑先生 「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる。」

一夏 「千冬姉!？」

アーサー (いつの間に!？ つかIS用のブレード軽々と持っているし!)

「動いたらガトリングガンぶっ放すぞコラ。」

ラウラ 「いつの間に背後に!？」

「貴様が第二世代機相手だからと調子こいてる間にだ。」

ラウラ 「くっ!」

織斑先生 「模擬戦をやるのは構わん。だがアリーナのバリアーまで破壊

する事態になられては、教師として黙認しかねる。この戦いの

決着は、学年別トーナメントでつけてもらおうか。」

ラウラ 「教官がそうおっしゃるなら。」

そう言うところラウラはISを解除した。あれ？織斑先生呼べば速攻で片付いたかもしれんな。これ。

織斑先生 「織斑、デュノア、一ノ瀬、アーサー。お前らもそれでいいな。」

時雨&アーサー 「はい！」

デュノア 「僕もそれで構いません。」

一夏 「は、はい・・・」

織斑先生 「では学年別トーナメントまで、私闘の一切を禁止する。解散！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

さて、セシリアとリンを見舞いに俺達は保健室に来たわけだが・

鈴音 「別に助けられなくてもよかったのに・・・」

セシリア 「あのまま続けていたら勝っていましたわ。」

一夏 「お前らなあ・・・」

「模擬戦どころか完璧に暴虐を受けてた奴らの言うことじゃねえぞ。」

シャルル 「二人とも無理しちゃって。」

一夏 「無理って?」

シャルル 「二人とも一夏にかっこ悪いところ見せちゃったから恥ずかしい

んだよね。」

一夏 「ん?」

いや、ん?じゃねえだろ。普通気付くだろ。

鈴音 「ななな何を言ってるのか全然分からないわね！」

セシリア 「べっ別にわたくし無理なんかしてませんわ！」

アーサー 「分かりやすい反応だな。なあ時雨？」

「ああ、だが一夏のほうは全く気付いてないみたいだが。」

本音 「みたいだね。」

一夏 「そもそも、なんだってラウラとバトルすることになったんだ？」

鈴音 「そ、それは・・・」

セシリア 「まあなんといいですか・・・女のプライドを侮辱されたから」

でありましたわね。」

一夏 「へ？」



鈴音 「バカって何よバカって！バカあ！！！」

セシリア 「一夏さんこそ、大バカですわ！！」

一夏 「何なんだよお前ら……」

そんなことを言っている……

??? 『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……』

「なあ本音……何か地響きが聞こえるんだが……」

本音 「あー……これはおりむーと組みたい人が……」

アーサー 「なるほど、理解した。」

「たぶんお前にも来るぞ……」

アーサー 「マジかよ！どうしよっかなあ……」

ばああああああああん!!!!!!!!!!!!!!

保健室のドアがぶち破られた。なんという人気だ。

女生徒A 「私と組もう！織斑君！」

鷹月 「私と組んで！アーサー君！」

アーサー 「え、えーつと・・・」

一夏 「みんなごめん！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

アーサー 「マジか！？なら・・・よろしく！鷹月さん。」

鷹月 「う、うん。よろしく！」

そんなこんなでみんな去って行ったが・・・

鈴音 「一夏！私と組みなさいよ。幼馴染でしょ！」

セシリア 「いえ！クラスメイトとしてここはわたくしと！」

山田先生 「だめですよ！」

セシリア&鈴音 「!？」

山田先生 「お二人のI S、ダメージレベルがCを超えています。ト  
ーナメント

参加は許可できません。」

鈴音 「そんな！私充分戦えます!!！」

セシリア 「わたくしも、納得いきませんわ！」

山田先生 「だめといったらだめです！当分は修復に専念しないと、  
あとあと、

重大な欠陥が生じますよ！」

鈴音 （優勝したらその子が一夏と付き合うのよね・・・）

セシリア （それだけは阻止しなければなりませんわ！）

鈴音&セシリア 「……」

何やらアイコンタクトをとったようだ。ああ……  
なんか変なうわさがあつたもんな……

鈴音 「いい、あんた達！絶対優勝すんのよ！」

セシリア 「わたくし達の分まで、頑張ってくださいな！  
心から応援いたしますわ！」

アーサー 「何か急に元気になったな……」

「まあ……変なうわさが立ってるし。共同戦線だろ。」

本音 「ああ、優勝したらおりむーと付き合えるっていう？」

「そうだ。何でそんなことになったのかは知らんが……」

一夏 「お、おう！任せとけ。」



シャルル 「ありがとう。二人の気持ちにこたえられるように  
頑張るよ。」

山田先生 「美しい友情ですね。」

山田先生はのんきなことを言っている・・・いや、そういう  
んじゃないけどな。セシリアと鈴音も保健室から出たようだ。

「さて、ちょうど六人ともいるから話したいことがあるんだが。」

鷹月&シャルル 「何？」

本音 「なにになに？」

一夏&アーサー 「何だ？」

「ラウラの専用機、シュヴァルツェア・レーゲンと当たった時  
のことなんだがな。」

一夏 「あー・・・どうしよっかなあ。」

鷹月 「そうだよね・・・」

アーサー 「まず、2対1の状況を作らねばならんだ。」

「背後を取ればいいんだがな。俺とアーサーがやっちゃったから  
ちよつと警戒されるよなあ・・・」

本音 「ちよつと自信ないよー」

「大丈夫、俺が特訓してやつから。」

そう言つて頭をなでる。

本音 「うん！分かったよー」

「だが、アーサーよ。お前シャルルと組まなくて良かったのか？」

アーサー 「ん？ああ、ラウラの専用機があを通りだからな。一夏のIS

には射撃武器がないから、組む相手がシャルルなら事欠かない。」

シャルル 「た、確かに・・・」

「まあ、あんまり考えても仕方ないか。とりあえず打倒ラウラに向けて

頑張ろうぜみんな！」

一夏 「だな！倒しに行こうぜ。」

シャルル 「そうだね。一度負かさないと。」

鷹月 「うーん・・・ちょっと自信ないなあ。」

アーサー 「三チームとも射撃武器ついてっから大丈夫だって。」

本音 「頑張るよ」

「それじゃあ、そろそろ戻るか。」

とりあえずみんなで寮に戻った。さーて。頑張るとしますかね。



## 第十七話 クラスリーグマッチに向けて（後書き）

第十七話終了

よろしければ感想よろしくお願いします

## 第十八話　IS特訓

さて、打倒ラウラにむけてIS特訓することになったんだが・・・

本音　「っしょ！はっ！ほっ！」

まだ歩くのもなかなかおぼつかないようだ。先は長そうだ・・・

本音　「ふう〜。何とか歩けたよ〜。」

「ああ、よかったよかった。もうちょっと早く動けるように頑張ろうな。」

本音　「ごめんね〜下手っぴで。」

「いや、気にしないでいいよ。これから上達するって。」

本音　「そうかな〜。」

「まあ、そんなもんだって。さて、まあ肝心の攻撃なんだけどさ、本音は剣道やったことあるか？」

本音 「全然ないよ。」

「だよなあ・・・まあ、基本から教えっから心配すんなよ。」

本音 「お願いね。」

そんなこんなで俺も内心しっかり教えられっか不安だったけどまあ、基本的な動きから教えてったんだが（父親譲り）・・・

「本音って飲み込み早いんだな・・・」

教え始めて二時間ぐらいで結構様になっていた。いやびっくりだ。俺は剣使うのは結構慣れるのに時間かかったからな・・・

本音 「えゝそんなことないよ。」

本人は全くの無自覚のようだ。しかしこれならもしかしたら・・・

「なあ本音。ちょっと教えたい技あるんだけど。まあ必殺的な。」

本音 「ふえ？なにになに？」

「『巻き技』っていうんだけど、相手の刀を弾き飛ばす技なんだよ。」

まあ俺の得意技なんだから。しばらくやってないからできっかなー  
なんて思いながら試しにやって見せたら・・・

「・・・」

黙るしかなかった。だって俺よりキレがいいんだもん。

本音 「？どうしたの〜時雨君。」

「本音めちやくちやうまいじゃん！」

言いながら本音の両肩をつかむ俺。いやマジで。そのぐらいだって。

本音 「ふええ！？いや、たまたまだって・・・」



「自信持っていていいって。これなら試合の時も通用すつから。」

本音 「そ、そうかな？」

「そうだよ！」

そう言っ て頭をなでる。

本音 「えへへ。」

なにはともあれ、本音の意外な才能がかいま見えたのであった。

## 第十八話 I S 特訓（後書き）

第十八話終了。

よろしければ感想よろしくお願いします。

## 第十九話 トーナメント組み合わせ決定（前書き）

大学が思ったより忙しいんでちょっとスローペースになる  
と思います、はい。

## 第十九話 トーナメント組み合わせ決定

「本音、トーナメントの組み合わせ発表されるみたいだぞ。」

本音 「分かった。一緒に行こ。」

「ああ。」

さーて、組み合わせ決定か。どんなもんかなー？

本音 「なんかざわついてるよ。」

「ん？確かに何だか騒がしいなあ。なんだろ。」

本音 「あー！時雨君あれ見て！！」

「んー？うわ……」

いやあ……唾然とするしかなかった。しょっぱなからこれか。

『織斑一夏×シャルル・デュノアVSラウラ・ボーデビツヒ×篠ノ之箒』

「なんちゅう組み合わせだよ。ていうかラウラは篠ノ之さんとペア・・・剣道で勝てる相手じゃねえぞ篠ノ之さん。」

本音 「そうだね。あ！私たちは誰が相手なんだろう。」

「ん・・・ああ、そっか俺らの相手はと・・・あ。」

本音 「なにになに？どうしたの？」

「俺らの相手は谷本さん達だ。」

本音 「ふえーそうなんだ。」

「その次の次くらいにアーサー達とみたいだ。」

アーサー 「そのようだな。」

本音と話しているうちにアーサー達がやってきたようだ。こいつ

らとも

後で戦うことなのか・・・アーサーのISが気になるなあ。

「アーサー達ははじめだれと戦るんだよ。」

鷹月 「私達は四十院さん達とだよ。」

「そっか。まあ負けることはないだろうな。」

アーサー 「まあな。次の次の対戦が楽しみだ。」

本音 「うん。頑張ろうね。」

アーサー 「しかし・・・一夏達が勝ったら勝ったで結構手ごわいな。」

専用機二機相手だしなあ。」

「まあそうだろうけど。アーサーも俺も、パートナーを全力でフ  
オロー

すれば勝機はあるだろうよ。」

鷹月 「でもやっぱり不安だよ。」

本音 「うんゝ。」

「大丈夫だよ本音。俺が全力で守ってやる。頑張ろうぜ！（ギリッ）」

アーサー 「俺もはなからそのつもりだ。負けねえからな。」

鷹月 「二人ともやる気だね^^」

本音 「分かった。頑張るよゝ。」

なにはともあれリーグマッチを迎えることになった。あれ？そういや

一夏達をみかけなかったな。完全に忘れてたぜ。

## 第十九話 トーナメント組み合わせ決定（後書き）

第十九話終了。

よろしければ感想よろしくお願いします。





本音 「分かった。」

「さーて、夜竹さん。やるぞこら。」

さゆか 「いくよー」

夜竹さんがブレードを持って突進してくる。単調な動きだ。  
普通にやれるか。俺はビームソードを構え、ブレードを切り返す。

さゆか 「! !」

夜竹さんが体勢を崩した。前が空になったところを  
ビームソードを一気にたたきこむ。

さゆか 「キヤーーーーー! ! ! ! ! ! ! !」

一撃でシールドエネルギーがゼロになり、ISが動かなくなった。  
本音のほうは・・・

本音 「はっ!」

癒子 「!?!」

巻き技でブレードを弾き飛ばしてフィニッシュに入ったようだ。

本音 「終わったよ。」

「グッジョブ。」

笑顔でハイタッチした俺たちだった。

## 第二十話 リーグマッチ初戦（1）（後書き）

第二十話終了。

よろしければ感想よろしくお願いします。

## 第二十一話 リーグマッチ初戦(2) (前書き)

一夏×シャルルVSラウラ×箒の前編です。

## 第二十一話 リーグマッチ初戦（2）

「初戦は楽に勝てた。」

アーサー 「こっちもだよ。割と楽だった。」

本音 「そうなんだ。」

アーサー 「対戦が楽しみだな。」

「まあ順調にいけば対戦できけどな。それより今は一夏達の試合だろ。あとどれくらいかな？」

鷹月 「もうすぐ始まるみたい。」

・  
・  
そんなことを言っていると試合開始のブザーが鳴った。と同時に・

「一夏が突進してったなあ。」

アーサー 「ああ。A I Cで防がれたがな。」

鷹月 「あ、でもデュノアさんが反撃してるよ。」

シャルルの反撃に対し、ラウラは後方へ逃げていく。それを上空から  
シャルルがラピッドスイッチで追っていく。

本音 「あ、でも篠ノ之さんが防いでるよ」

「さすが。銃弾をブレードではじくのはなんてことないなあ。」

アーサー 「ああ。お、一夏のほうに行ったぞ。つか一夏と互角じゃん。」

どうやら一夏とは一進一退のようだ。だが・・・

箒 「何をする!？」

ラウラがワイヤーで篠ノ之さんをとらえて地面にたたきつけた。

鷹月 「ねえあれって・・・」

アーサー 「協力する気ゼロだな。」

「まあ・・・協力するところが想像できないがな。ラウラは。」

本音 「ふええ。」

「篠ノ之さんは・・・ああ、シャルルに向かっていったな。」

アーサー 「だが相手は射撃武器ならなんでもござれのシャルルだぜ。」

正直どうにもならんよ。」

「ああ・・・対戦する時は俺とかアーサーで相手するしかないよなあ。」

アーサー 「同感だ。」

鷹月 「でも織斑君相手に勝てる自信ないよ。」

アーサー 「鷹月さん・・・そこは耐えるしかないよ。」



「本音ならもしかしたらいけっかもしれないなあ・・・」

本音 「ふえ！？そ、そんなことないよ」

アーサー 「んなこといつてるあいだに篠ノ之さんが動かなくなっただぞ。」

「どうやら一夏達がラウラを押してるみたいだぜ。」

一夏の攻撃がA I Cで防がれてる間にシャルルがラウラに被弾させたようだ。

鷹月 「A I Cで完全に防いでるんじゃないの？」

「一つの攻撃を防ぐのに集中すると無防備になるんだよ。だから、2対1だと

あれはもう通用しねえんだ。」

アーサー 「多対一には向かない装備だぜ。」

これでひとまずA I Cは攻略したとして・・・あれ？

「一夏の奴シールドエネルギーが限界らしい。」

鷹月 「それってまずいんじゃない・・・」

鷹月さんの言うとおり、逆に一夏達が押されてきた。さてこれはどうなるかな？

## 第二十一話 リーグマッチ初戦（2）（後書き）

第二十一話終了。

次回は後篇ですね。

## 第二十二話 リーグマッチ初戦(3)

「一夏達が押されてんなあ・・・大丈夫かな？」

のんきにそんなことを思っていると・・・

シャルル 「まだ終わってないよ!!」

シャルルが一瞬で距離を詰めてラウラに銃撃を放つ。

ラウラ 「イグニッションブースト!? そんなデータはなかった!」

シャルル 「今初めてつかったからね!」

ラウラ 「こんな闘いの中で覚えたというのか!? だが・・・私の  
停止結界の前では無力・・・!?!」

一夏が真後ろからアサルトライフルをぶっ放したようだ。

アーサー 「やっと出たかコンビネーション。」

「もっと早くできたと思うけどな。」

ラウラ 「この・・・死に損ないがああああ!!!!!!!!!!!!!!」

一夏がラウラのワイヤーで吹っ飛ばされる。つうか・・・

「ほとんど一夏がふっ飛ばされてんなあ。」

アーサー 「相当恨まれてんだな。残念だね。」

鷹月 「いやまあ・・・否定できないことが悲しいわね。」

本音 「あはは・・・」

シャルル 「どこを見てるの!?!」

ラウラ 「!?!」

シャルル 「この距離なら外さない!!」

ラウラ 「シールドピアーズ!？」

ラウラが楯殺し（シールドピアーズ）で一気に吹っ飛ばされた。  
追い打ち  
をかけるようにシャルルがラウラにボディーブローをかます。

ラウラ（私は負けられない・・・負けるわけにはいかない!!）

誰もが一夏達の勝利を確信していたその時。

ラウラ 「あああああああああ!!!!!!!!!!」  
1

ラウラの叫びとともにシュヴァルツェア・レーゲンが禍々しく  
変形し始めた。

時雨&アーサー 「何これー」

鷹月 「いや、なんで二人ともそんな棒読みなの・・・」

本音 「そうだよ。落ち着きすぎだよ。」

「ごめん・・・俺らは結構ピンチとか慣れてるからさ。何か得体のしれない

事が起きててもあんまり驚かないんだわ。」

アーサー 「そうそう。」

鷹月 「過去にどんな経験してんのよあなた達・・・」

時雨&アーサー 「気にしたら負けだ。」

本音 「そう言われると気になるよ」

「なんでもいい。俺らはとりあえず避難するか。」

アーサー 「ちっ。ISを使わずとも俺らなら楽にやれんのかなあ。」

「仕方があるまい。ここはIS学園だからな。」

鷹月 「あの・・・二人とも何言ってるの？」

「気になるか？」

本音 「ねえねえ。鷹月さんにも話してあげようよ。」

アーサー 「いやそういわれても・・・」

「いいよ。ばらさないんなら後で話してやるから。」

アーサー 「おいおい！いいのか？」

「いずればれるさ。地道にばらせば問題ない。んじゃ、避難しよう。」

アーサー 「ああ。」

鷹月 「わかった。」

本音 「わかったよ。」

そんなこんなで俺らは避難した。その頃アリーナでは・・・



箒 「今のお前に何ができる。白式のエネルギーも残っていない状況で、

どう戦う!？」

一夏が一人で変形したISに挑もうとしていた。

箒 「見ろ・・・お前がやらなくても状況は収給される。」

教師部隊が変形したISをとり囲む。

一夏 「違うぜ箒・・・全然違う。俺がやらなきゃいけないんじゃないんだよ。

これは、俺がやりたいからやるんだ!」

箒 「ならばどうするというのだ!」

敵ISに挑もうにもどうにもならないかに見えた・・・その時。

シャルル 「エネルギーがないなら、持ってくればいいんだよ。リヴァイブの

コアバイパスを開放。エネルギーの流出を許可。」

一夏のI Sにエネルギーが送り込まれる。

シャルル 「約束して。絶対負けないって。」

一夏 「もちろんだ。負けたら男じゃねえよ。」

シャルル 「じゃあ負けたら、明日から女子の制服で通ってね。」

一夏 「い、いいぜ。」

シャルル 「これで完了だ。」

一夏 「ありがとよ・・・白式を一極限定モードで再起動する!」

白式が片腕だけ展開される。

シャルル 「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね。」

一夏 「いや、充分さ!」

すぐに敵I Sがこちらを向く。

箒 「一夏!」

一夏 「!!」

箒 「絶対に死ぬな!」

一夏 「信じろ・・・俺を信じるんだ箒。ただ俺を信じて待っていてくれ。必ず勝つ。」

そういうと一夏はゆっくりと敵I Sに近づいてゆく。

一夏 「零落白夜、発動! 行くぜ偽物野郎!」

両者刀を構える。敵I Sが先に一夏を襲ってくる。一夏は落ち着いて

敵I Sの刀(雪片?)をはじき・・・

一夏 「はああああ!!」

すばやく敵ISの胸元を切り裂いた。そしてぱっくりとわれた胸の中から  
ラウラがゆっくりと放出されたのだった。

## 第二十二話 リーグマッチ初戦(3) (後書き)

第二十二話終了。

次回は・・・まあ風呂ですね！大浴場ですね！  
よろしければ感想お願いします。

## 第二十三話 大浴場（男）解禁

シャルル 「結局トーナメントは中止だって。ただ、個人データはとりたいたから、

一回戦は全部やるそうだよ。」

一夏 「ふーん。」

「あーあ、つまらんなあ。アーサー達と戦ってみたかったのに。」

アーサー 「そうだな。だが、ラウラが無事でよかったじゃねえか？」

本音 「そうだよ」

「まあそうだけだよー」

鷹月 「一回戦は全部やるんだ。セシリアさんと鈴音さんの対決とか見てみたかったなあ。」

一夏 「あの二人がペア組んでやってきたら大分やりづらいだろうなあ。」

シャルル 「そうだよね・・・」

ラウラのISの暴走が収束して、一夏たちとも合流してそんなことを話しながら  
夕飯を食べていると・・・

女生徒A 「優勝・・・チャンス・・・消えた・・・」

夜竹 「交際・・・無効・・・」

鏡 「うわああああああん!!!!!!!!!!!!!!」

何か泣き叫びながら去って行った・・・つか・・・

「なんかトーナメントで優勝したら一夏と付き合える的な噂あったしな。」

鷹月 「織斑君だけじゃなく一ノ瀬君たちもだよ。」

アーサー 「一体どこからそんな噂が・・・」

シャルル 「ほんとだよ……（第一僕男じゃないし……）」

本音 「そっか。それでさゆか達あんなだったんだ。」

一夏 「おつかしいなあ……俺は箒に『トーナメントで優勝したら……』」

「篠ノ之さんならさっきから一夏のほうじーつと見てるぞ。」

一夏 「え？ ああ……」

一夏が篠ノ之さんのほうへ歩いて行った。さて……

「噂の元は恐らく篠ノ之さんと一夏だろうから、ここにいれば聞けるぜ。」

本音 「そだね。」

アーサー 「なんだか予想がつきそうなんだけどな……」



鷹月 「織斑君のことだから何か勘違いされるようなこと言ったんだろうね。」

シャルル 「一夏は唐変朴だからね・・・」

一夏 「そういえば箒、先月の約束な・・・」

箒 「えええ!？」

一夏 「つきあってもいいぞ。」

アーサー 「やはりそうだったのか。」

シャルル 「やはりって？」

アーサー 「恐らく篠ノ之さんが一夏に『トーナメントで優勝したら、一夏と

付き合ってほしい』とでも言ったんだろうなと思ってさ・  
・・」

本音 「えええ!?!篠ノ之さん結構やるね。」

「やるな。たしかに勇氣あるよ。でもそれってさ……一夏に伝わってんのか？」

アーサー 「……そうだよな。」

シャルル 「たしかに。」

鷹月 「否定できないわね。」

箒 「何!？」

一夏 「だから、つきあってもいいってぐえ!？」

箒 「本当か？ 本当なんだな!？」

一夏が胸倉を掴まれてるよ……遠目からだ一夏が脅されてるみたいに見える。

箒 「なぜだ？ り、理由を聞こうではないか。」

一夏 「幼馴染の頼みだからなあ。付き合うさ。」

箒 「そうか!!」

一夏 「買い物くらい。ぐえ!!?」

渾身の左ストレートか。自業自得だね。

箒 「そんな事だろうと思ったわ。ふん!!」

一夏 「がはっ!!」

「倒れかかったところに腹にキックか。容赦ねえなあ。」

シャルル 「一夏ってわざとやってるんじゃないかって思う時あるよねー。」

アーサー 「それをなにげなくやってるのが唐変朴なんだ。」

本音 「でも今回はしょうがないよねー。」

一夏はいまだにもだえている……ドンマイ。

山田先生 「織斑君、デュノア君。朗報ですよ！」

一夏 「ん？」

山田先生 「今日は大変でしたね。でも！二人の労をねぎらう場所が、今日から

解禁になったのです！」

一夏 「え？」

シャルル 「場所？」

アーサー 「もしかしてそれって……」

「ああ。間違いないな。でもよアーサー。それは……」

山田先生 「男子の……大浴場なんです！」

「俺らも男子っすよ山田先生・・・」

アーサー 「そうですよ・・・」

俺ら完全に忘れ去られていた・・・

~~~~~

アーサー 「ふうー。久しぶりの風呂だー。」

一夏 「あゝ。生き返るうゝ。」

大浴場に来た俺達は速攻で体を洗って湯船につかっていた。

「アーサーは確か風呂好きだったよな。」

アーサー 「そうだよ。風呂は最高だよ。」

一夏 「へえー、そうだったのか。」

アーサー 「ああ。デンマークから飛行機ですぐアイスランドだからな。

あそこの温泉はいいぞ？」

一夏 「行ってみてえなあ・・・」

「アイスランドか・・・卒業したら本音と行ってみてえよ。」

アーサー 「お？お前は布仏さんを狙ってんのか。そうかそうか・・・」

アーサーが気味悪く笑っている。だがそんなことで動じる俺ではない。

「アーサーだってシャルルを狙ってんだろ？ひそかに。」

アーサー 「な！？なぜ知っている。」

すかさず反撃だ。しかしこの程度でうろたえちゃいかんよアーサー¹。

「暇さえあればシャルルのほう見てるだろお前。分かりやすいなお前。」

アーサー 「うぐう・・・言い返せない・・・」

一夏 「何気にお前ら二人とも好きなやつできたのな・・・」

アーサー 「ああ。でも一夏には篠ノ之さん達がいるじゃん。」

一夏 「え!?! いやあいつらは・・・どちらかといえば嫌ってると思うぞ？」

特に箒とか鈴音とかはさ・・・」

篠ノ之さん達苦労しそうだな・・・全く鈍感すぎるぜ一夏。

「そろそろ出るぞ。」

アーサー 「ああ。俺は長風呂してるよ。先に出ててくれ・・・」

「分かった。」

一夏 「んじゃ出るか。」

一夏と俺は浴場から出て行った・・・

~~~~~

(アーサーSIDE)

「さて、まだ入ってるか・・・」

一夏達が出て行ったあと俺はまだ湯船につかっていた・・・しかし・・・

「『アイスランドに二人で温泉に行く』か・・・その発想はなかったぜ時雨。」

そんなことを思いながらほわ〜つとしてると・・・

??? 「お、おじゃまします・・・」



誰だ？一夏達は出たはずだが・・・ってこの声は！！

「シャルル！？」

なんとシャルルが風呂に入ってくるとは！んなバカなああああ  
ああ！！！！

シャルル 「あ、あんまり見ないで？アーサーのエツチ・・・」

「ご、ごめん・・・って、な、なんでシャルルが！？」

シャルル 「僕と一緒にだと嫌？」

「そんなわけないだろ！むしろ大かんげ・・・いや、なんでもない。」

思わず本音を言いかけてしまった・・・危ない危ない。

・ シャルル 「やっぱりその・・・お風呂に入ってみようかなって・・・

迷惑ならあがるよ？」

「いや、あがるなら俺が・・・もう充分入ったし・・・」

シャルル 「ま、待って!」

あがろうとしたんだが引きとめられてしまった・・・のぼせそうだよ俺。

シャルル 「話があるんだ。大事なことから、アーサーにも聞いてほしい。」

「あ、ああ・・・分かった。」

俺達は自然と背中合わせに湯船につかることになった。なんということだ・・・

シャルル 「その・・・前に言ってたことなんだけど・・・」

「学園に残るって話だっけ？」

シャルル 「そう、それ。僕ね、ここにいようと思う。アーサーが

いるから僕は

ここにいたいと思えるんだ。」

「そ、そうなのか？」

シャルル 「それにね、もう一つ決めたんだ・・・僕のあり方を・・・」

そういうとシャルルは後ろから抱きついてくる・・・って!?

「あ、ありがたって？」

背中にあたってる! あたってるって胸!!!

シャルル 「僕のことはこれから、『シャルロット』って呼んでくれる？」

二人きりの時だけでいいから・・・」

「それが本当の名前？」

シャルロット 「そう・・・お母さんがくれた、本当の名前・・・」

そうなのか・・・ていうか俺も話があるんだが・・・風呂上がってから言おうと思っ  
てたのに・・・ここまで言われたら言うしかねえな・・・

「分かった。シャルロット・・・俺も話があるんだが・・・いいかな？」

シャルロット 「え？」

「ほんとにリーグマッチが終わってから言おうと思ってたんだけど・・・  
今言いたくなったから・・・いいか？」

シャルロット 「う、うん・・・なに？」

俺は深呼吸する。が・・・心臓が早鐘を打ったまま緩まねえ。まあしかたねえか。

「俺・・・シャルロットのことが好きだ！俺と付き合ってくれな  
いか。」

シャルロット 「！！」

シャルロットが一瞬びくってなったのがわかった。うう・・・だめだったかな？  
つか相手のほう見れない状況で告白するって考えてみたらだめかも。なにやっ  
てんだよ俺。

「あ、あの・・・」

シャルロット 「いいよ・・・僕も、アーサーが好きだから。」

シャルロットが後ろから俺の首に腕をまわして抱きしめる力を強めてくる。

いろんな意味で本格的にのぼせそうだぜ・・・

「そ、それじゃ・・・改めてよろしくな、シャルロット。」

シャルロット 「うん・・・」

「それとあの・・・シャルロット。」

シャルロット 「なに？」

「えっと・・・さっきからずっと胸とか当たってていろんな意味でやばいんだが・・・」

シャルロット 「ふわあ!!」

今頃になってやっと恥ずかしくなってきたようだ・・・顔が真っ赤だ。

シャルロット 「じゃ、じゃあ。先に出るね!」

「ああ、すぐに行くよ。」

俺はシャルロットよりも少し遅れて浴場を後にした・・・

~~~~~

そんなこんなで部屋に戻ってきた俺達だったが・・・

「・・・」

シャルロット 「……」

なぜか無言でベッドに座っていた……

「あ！お茶飲まねえか？」

シャルロット 「あ、うん！じゃあお願い。」

無言が気まずいのでお茶を注ぎに行く。

「はい。」

シャルロット 「あ、ありがとう……」

とりあえず茶を渡す。シャルロットは顔が真っ赤だ……
まあさっきのことがあったからな……

シャルロット 「あ、あのさ……」

「なんだ？」

シャルロット 「アーサーはいつから僕のこと好きだったの？」

なんとまあ恥ずかしい質問が来たもんだな・・・えとたしか・・・

「夕飯を食べさせた時・・・」

シャルロット 「そ、そうなんだ・・・」

「あんときのシャルロットむちゃくちゃ可愛かった！」

シャルロット 「ええ！？そ、そんなことないよ！」

「ほんとだって！もう、抱きしめたいくらいだったし！！あんときは

できなかったけど・・・」

シャルロット 『／／／／』

シャルロットが真っ赤になってうつむいてしまった・・・あれ？

俺なんか悪いこと言ったかな？

シャルロット 「……いいよ？」

「え……うわっ！」

シャルロットが前から首に手をまわして抱きしめてきた。俺もゆつくりと

シャルロットの背中に手をまわして抱きしめる。

「あったかいな……シャルロット。」

シャルロット 「うん……アーサーも……」

「そろそろ寝るか？」

シャルロット 「うん……ねえアーサー。」

「なんだ？」

シャルロット 「その……おやすみのキス……して？」

そこで上目づかいは反則だよ、シャルロット。

「目、つぶってくれ。」

シャルロットが目をつぶったのを確認すると、俺はゆっくりとキスをした。

ただ唇を触れ合わせるだけの浅いキスだったが、とても甘かった。数十秒ついばむようなキスを続けやがて離れ、俺はシャルロットをベッドに寝かせた。

「おやすみ、シャルロット。」

そのあとすぐに俺も隣のベッドに寝たのだが・・・夜中の二時くらいまで

寝付くことができず翌日寝不足になったのであった・・・

第二十三話 大浴場（男）解禁（後書き）

第二十三話終了。

感想よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6965w/>

インフィニットストラトス もう一人の男は超能力者!?

2011年11月17日03時15分発行